行者は之を制して、

『お前は何も喋つてはいけない。只俺が應答するのを聞いて居ろ！』

と言ふうちに、もう妖怪は廟の內へ入つて來て、大きな聲で、

『今年の祭主は何家だ？』といふ。

『陳澄、陳清の家です』と行者が答へる。

妖怪は此の答を聞くと、ちと豫期の異つたやうな顏をして、『いつも來る供物は、俺が一言いふと、もう正氣を失つて、何とも返事をする者はないのだが、今年の童男は餘程變つて居る』と呟きながら、尙ほも童男に向つて、

『例年の通り、これからお前達を吃ふから、覺悟をしろ！』といふ。

『はい宜敷うございます。何卒、召上つて下さい。』と行者が答へる。

これを聞いて、妖怪は愈々氣味が惡くなつて、容易に手を着けようともしない。

『例年は童男を先に吃ふのだが、今年は先づ童女から吃はう』と言ひながら、手を伸ばして、八戒を捉へると、八戒は慌てゝ卓から跳下りて、本相を現はし、釘鈀を取つて突きかゝつたので、妖怪は急に手を引込めて、逃げ出した。行者も此の時本

行者八戒逐妖怪

相を現して床へ下りると足許に兩個の魚鱗が落ちて居るばかりで、妖怪は影も形も見えないので、兩個は直ぐに空中に赶上ると、かの妖怪は空手で雲の上に立つて居たが、兩個の近づくのを見て、

『汝等は何處の和尙だ？』と問ふ。『何で此處へ來て邪魔をするのか？』

『我們は東土大唐の天子の勅命を奉じ、西天へ經を取りに行く高僧の徒弟だが、昨夜汝が靈感大王と號して此の里の童男童女を吃ふと聞いて、汝を捉へるために、假に童男童女になつて待つて居たのだ。』

と行者が大音に罵るのを聞いて、妖怪は一陣の風となつて通天河の底へ跳込んで

しまひました。

『此の妖怪は河中に棲むものに相違ない。明日は何とかして、彼奴を引捉へ、師父を送つて河を渉ることにしよう。』

行者が斯う言ふのを聞いて、八戒は直に雲を下りて廟へ回り、牲醴の猪や羊を取つて、陳氏の家へ運び込みました。

此の時三藏と沙和尙とは、陳氏の兄弟と廳で話しながら、徒弟們の消息を待つて居たが、兩人が牲醴を持つて回つて來たのを見て、妖怪の樣子を尋ねます。行者が一伍一什を物語るのを聞いて、三藏を初め陳氏兄弟も大喜びをして、やがて師弟は設けの床へ入り、其の夜は樂々と脚を伸ばして寢みました。

(六) 魚籃觀音

三藏師弟は陳氏兄弟の厚い欵待を受けて、心地よく睡りましたが、曉方近くなると、急に寒さが增して睡れない程になつたので、一同は跳ね起きて衣服を重ね、門を開けて外の樣子を見ると、冷るのも道理、一夜の中に大雪が降つて、

野も山も一面の銀世界と變つて居る。師弟は此の時ならぬ雪を眺めながら、一同爐を圍んで食事を濟ませました。其の間にも雪は愈々降り積つて、最早二尺以上にもなつたので、三藏は心の中では焦燥しながらも、餘儀なく陳澄兄弟の欵待を受けて、雪の晴れるまで逗留することに決めました。すると其の日の晩齋の時に、聞くともなく往來の人の話して行くのを聞くと『八百里の間に氷が張り詰めて、まるで鏡のやうになつて、旅人が澤山往來して居る』といふので、三藏は徒弟に向つて、

『人の往來があるといふから、誰か行つて河の樣子を見て來い！』といふ。

陳澄は之を聞くと、

『長老、お忙ぎになることはありません。今日はもう晩い。まあ〳〵明日の事になすつたらいゝでせう。』

と言つて其の夜は無理に引留めました。

翌朝目が醒めると、三藏はもう沙僧を呼んで、出發の準備をせよといふ。沙僧は考へ深い眼容をして、

『師父、お出掛けになるにしても、人の話だけでなく、一應御覽になつた上の事に

なすつたら如何です？』
と諫めるのを聞いて、陳澄も『如何にも其の通りです』と沙僧の説に加擔し、直に六匹の馬を引出させて、三藏師弟と陳氏兄弟と六人が、馬を並べて河の様子を見に行きました。やがて河邊へ着くと、果して澤山の人が氷の上を往來して居るので、三藏は陳氏兄弟に向つて、
『此の人々は氷を渡つて何處へ往くのです？』と尋ねる。
『河向ふは西梁國の地で、此の人々は商賣のために往來するのです。此處で百錢の物は彼方では、萬錢になりますので、此の人々は始終命掛けで此の河を渡つて往來して居ります。』と陳澄が答へる。『常時には小舟に駕つて波を越えて行くのですが、今河筋が凍りましたので、此の通り命を投出して氷上を歩いて行くものと思はれます。』
三藏は之を聞いて深く感じ、
『世間の事は名と利である。貧僧が勅を奉じて君に忠を盡すのも、つまりは名を重んずるためだと思へば、彼等が利のために命を捨てるのと、格別差ふ所はない！』

陳通天妖怪術
河捉唐

と言つて、沙僧が切に諫めるのをも肯かず、直に陳氏の家へ引回して、行李をまとめ、兩個の老人に別れを告げて出掛けました。

師弟は氷を踏んで路を急ぎ、一日一夜を走り續けて、天明ごろに些少の乾粮を吃ひ、また馬を進めて通天河を西に向つて渡つて行くと、忽ち氷の底で大きな音がして、氷が二つに裂けました。行者は慌てゝ空中へ跳上つたが、他の三人は馬と共に水中へ吸ひ込まれてしまひました。八戒と沙僧は一旦水の底に落ちたが、直に馬を曳いて浮かび出すと、行者は空中に立つて居て、

『師父は何うなすつた？』と尋ねる。

『師父は見えなくなつてしまつた。』と八戒が答へる。『兎に角岸へ上つた上で何とか相談しよう。』

三人は白馬を曳いて東の岸へ上り、陳澄兄弟の所へ引回して行くと、兄弟は三人の衣服の濡れて居るのを見て、忙がしく三藏の事を尋ねましたが、始終の話を聞いて、老人らは涙を流して、

『それだから言はないことではない。』と言つて殘念がる。『雪の融けるのを待つて

船で送らせようと、あれ程にいふのに、我執を張つてお出掛けになつたが、たう〳〵こんな事になつてしまつた。可憐しい事だ！』

行者は老人らの歎くのを見て、

『然う歎くことはありません。これは靈感大王の所爲に相違ないのだから、まあ手傳つて衣服でも乾して、我們があの妖怪を退治するのを待つて居て下さい。然うすれば此の村のためにも後日の災害の根が絶える譯だから。』

老人らは之を聞くと大に喜んで、直に齋飯を調へて三人を欵待したので、三人は腹を滿たし、衣服を乾かしてまた河の岸へ行きました。

三人は同伴つて水底へ下り、やゝ久しく行くと、一座の樓臺の前へ出ました。門を見上げると「水黿之第」といふ四大字を現はした額が掲げてある。行者は八戒と沙僧を門外へ待たして置いて、自分は長脚蝦になつて、門の裡へ入つて行くと、かの妖怪は正面に坐り、左右には多くの水族を並べて、唐僧を吃ふ相談をして居る所でした。行者は丁度通りかゝつた大肚蝦を呼留めて、

『今御相談中のやうですが、其の唐僧といふのは何處に居りますのです？』と尋ね

る。

『お前知らないのか?』と大肚蝦が答へる。『唐僧は大王樣が捉へていらしつて、奥の間の石匣へ入れてあるのだよ。あの唐僧は十世の修行を積んだ人で、其の肉を一塊食べれば、壽が延びるといふので、若し明日になつても、徒弟們が尋ねて來ないやうだつたら、料理してみんなで吃べようといふことになつて居るのさ。』

斯う言つて、大肚蝦は尙ほも細々と此度の事情を話した。大王が靈感大王の廟で唐僧の徒弟に苦しめられた事から、法術を以て急に寒風を吹起し、大雪を降らして、一夜の中に通天河を氷となし、且つ多くの人の氷上を往來する體を見せて、唐僧を欺き、河の中程まで誘ひ出して、跫音を相圖に氷を開いて水中へ曳込んだ事まで殘らず話しました。行者は之を聞くと直に奥へ跳んで行きましたが、果して一個の石匣があつて、其の中から三藏の哭聲が聞こえるので、行者は聲を掛けて三藏を慰めて置いて、大急ぎで門外へ引返しました。さて行者は八戒と沙僧に中の樣子を話して妖怪を水上へ誘出すやうに言付けて、自分は先へ河の外へ出て待つて居ると、程なく河浪が山のやうに飜騰つて、八戒、沙僧の後から、妖怪は、一根九瓣の赤銅の鎚

を揮つて追つかけて來たが、行者と交戰つてまだ三合にもならないうちに、如意棒を架住めかねて、水裡へ逃込んでしまひました。行者は殘念がつてもう一度誘出したいと思つて、八戒と沙僧を再び水底へ遣つて見たが、妖怪は前回に懲りて、石塊や泥土を積んで、內部から門を塞ぎ、呼んでも罵つても一向に出て來ないので、兩個は餘儀なく水上へ引返しました。

行者は兩個の話を聞くと、當惑して、此の上は南海へ行つて觀音菩薩を迎へて來る外はないと言つて、急に雲に駕つて飛んで行きました。程なく普陀巖の上へ行つて、雲を下りると、諸神が行者を迎へて、

『菩薩は朝から單身で竹林へ入られて、後刻大聖が見えるから、爰で接待して居よといふ分付けでした』といふ。

行者は不審に思ひながら、暫く待つて居たが、菩薩は容易に歸らないので、性急の行者は待遠しくなつて、竹林の外まで行つて見ると、菩薩は獨りで紫竹林の中へ坐つて、まだ纓絡をも戴かず、袍をも着けず、手に鋼刀を執つて、しきりに竹を削つて居ます。行者は大聲を擧げて、

行者拜觀音請解師父難

『菩薩、師父の身に災難が起つたので參りました。通天河の妖怪の素性をお致へ下さい。』といふ。

菩薩は之を聞いて、たゞ一言、

『あちらで待つて居よ。』

と言つたきり、せつせと手を動かして居る。行者は畏まつて、元の場所へ回つて待つて居ると、少時して菩薩は手に紫竹の籠を提げて、林から出て來たが、

『悟空、さア汝と一緒に行つて、唐僧を救つて來よう。』

と言ひつゝ、祥雲を起して、頃刻の間に通天河へ參りました。

其の時菩薩は腰に束ねた絲縧を解い

て、籃を結び、雲の上からする〳〵と河中へ下して、口の中で、

『死んだ者は退け、生きた者は住まれ！』

と七遍繰返して唱へながら、再び籃を引上げると、籃の內には一尾の金魚がぴちぴちと跳て居ました。

『悟空、これが妖怪だ！』と菩薩が言つた。『さア、快く水の底へ行つて、師父を救つて來るがよい。』

行者は呆氣に取られて、籃の中の金魚を眺めて居ると、菩薩は笑つて此の魚の來歷を說き聞かせました。此の金魚は落伽山の蓮池に住んで居たものですが、每日水の上へ頭を出しては經を聞くうちに、自然と修業が積んで、通力を得るやうになつた。するとある何時の間にか、海潮に乘つて池を出て、此の河へ來て主になつたのです。あの一根九瓣の銅槌は、蓮の蕾を鍛煉したものです。菩薩は今朝蓮の花を看ようとして、始めて此の金魚の居ない事に氣がつき、直に竹林へ入つて、籃を作つて、此の魚を收める用意をして居たのでした。

行者は此の話を聞くと、菩薩の前に跪いて、かの陳氏兄弟を初め一村の人々に

魚籃觀音

菩薩の姿を拜ませて、此の妖怪の素性を話し、人々の信心を起させるやうにしたいからと願ひ、直に村へ回つて此の由を傳へたので、一村の老幼男女は爭つて河邊へ出て、掌を合せて活觀音菩薩を拜みました。其の中に畫を描く者があつて、此の時の菩薩の姿を寫生したのが、後世に傳へる魚籃觀音の像だと言ひます。

さて觀音菩薩を見送つた後、八戒と沙僧は水を分けて水黿の第へ下つて見ると、其の邊は魚の死骸で埋まつて居ましたが、直に奥へ入つて石匣を開いて、三藏を救ひ出して來ました。陳氏兄弟は唐僧の無事な姿を見て、喜び迎へて、跪いて禮を述べました。此の時行者は陳氏兄弟に向つて、

『斯うして妖怪を退治した上は、今年からもう祭をするには及ぶまい』と言つたが

『其處で一つ所望があるが、急いで船を搜して、我們が河を渡れるやうにして貰ひたい。』

兩人の老人は之を聞くと、

『それは何よりも容易い御用です。』と答へる。『早速新しい船を造つてお送り申しませう。』

斯う言つて居ると、不意に河の中から聲を擧げて、

『孫大聖、船なぞを造るには及びません。私がお送り申します。』

と言ふものがあるので、一同は驚いて其の方へ眼を向けると、水の底から一個の老黿が浮み出しました。行者は屹と其の方を見て、

『汝は何者だ？』と詰問する。『何の縁故で我們を送つて行かうといふのか？』

『私は決して怪しい物ではありません』と老黿が言つた。『大聖はまだ御存知ないでせうが、此の河の底にあるあの水黿之第は、本來私の住宅でしたが、九年前の海嘯の時、あの妖怪が潮に乘つて此の河へ入込み、暴力を揮つて、私の眷族を苦め、終に私們を逐出して、己れの巣穴に致しましたのです。今日幸に大聖のお骨折であの妖怪が退治されましたので、第宅がまた私の手へ還り、こんな嬉しいことはありません。ですから、せめては皆様を彼岸までお送り申して、此の御恩に報ひたいと存じます。若しこれでもまだ御不審が晴れませんやうなら、天に誓つて、僞りでない證據をお目にかけませう。』

斯う言つて、老黿は紅色の口を開いて、誓ひを立てたので、行者は笑ひながら、

『よし〳〵、よく分つた。』と言つたが『上つて來い、上つて來い！』

やがて岸へ近づいて、崖を爬上つて來るのを見ると、周圍四丈ばかりもある白蓋の老黿でした。行者は直に馬を牽いて蓋上へ乘り、三藏を馬の頸の左へ立たせ、沙僧は右に、八戒は後に立つと、行者は馬の前に立ち、白黿の鼻へ紐を通して韁繩にし、岸を下りて水面に浮びましたが、老黿は足を開いて水を踏むこと、平地を行くと同じやうで、八百里の通天河を只一日に泳ぎ越して、師弟を西岸へ渡しました。

此の時三藏は合掌して、老黿に禮を述べた。

『大層苦勞をかけたが、今は別にお禮に贈るやうなものもない。』

『何も頂戴するつもりはありませんが、たゞ西天へお着きになりましたら、佛祖に伺つていたゞき度い事が一つあります。』と老黿がいふ。『私は此處で修業すること一千三百餘年になりますが、何時になりましたら、此の本相を脫して、人間になることが出來ませうか。これだけの事を伺つていたゞきたいのです。』

三藏が首肯いて見せると、老黿は嬉しさうに首を搖つて水中へ沈んで行きました。

（七）獨角大王

三藏師弟は通天河も過ぎて、西へ進むうちに、時節は冬の眞中に入つて、又々山路へかゝり、雪を冒して進んで行くと、遙か彼方の山の凹處に、樓臺聳える樣子が見えたので、三藏は喜んで、

『あすこに人家が見えるやうだが、誰か行つて齋飯を化うて來ぬか？』といふ。

行者は睛を凝らして眺めて居たが、

『師父、あすこはいけません。』といふ。『あの邊の雲氣を見ると、どうも妖精の氣があります。あすこへは決して近づいてはいけません。』

斯う言つたが、行者は三藏の飢ゑて居る樣子を見て、

『師父、且く馬から下りて、老孫が齋を化うて來る間、此處で待つて居て下さい。併し此處を離れると必ず吉い事はありません。』

と言ひつゝ如意棒を取つて地上に圈を描き、三藏を其の中間に置き、八戒、沙僧を左右に立たせ、三藏に向つて、

画圏子悟空誡師徒

『老孫の描きました此の圏の中にさへお在でになれば、金城鐵壁の中に居ると同様で、如何なる妖魔も近づくことは出來ません。呉れ〴〵も此の圏の外へお出になつてはいけません。』と言ひ置いて、雲に駕つて南の方へ飛んで行きました。

三藏師弟は圏の中へ入れられて、最初のうちは行者の誡めを守つてじつとして居たが、いくら待つても行者が囘らないので、次第に空腹を感じて來る上に、風に吹曝されて、骨まで凍るかと思はれる程の寒さなので、三藏も終には堪へきれなくなつて、

『あの猴は全體何處へ行つたのか？』と獨語のやうに呟いた。

八戒は之を聞くと、腹の中の不平が一時に突き上つて來て、

『人をこんな牢の中へ入れて置いて、自分では何處かで愉快をして居るに相違ありません。』と言つたが、『こんな吹曝しに立つて居ては、脚が冷えてたまりませんから、兎も角も出掛けませう。且く行くうちには、師兄も齋を化うて後から赶ひつくでせう。』

三藏も斯う言はれるとつひ其の氣になつて、行者の誡めをも忘れ、二個の徒弟と共に西の方へ歩き出しましたが、一時と經たぬうちに、先刻見た樓閣の前へ着きました。見上げると、南向きの立派な屋敷で、門外には白壁を廻らし、大門は半分程開いたまゝになつて、其の邊は森閑として人の居る樣子もありません。八戒は三藏と沙僧を門外に待たして置いて、中の樣子を見に入つて行きましたが、廳へ上つて見ても、たゞがらんとして人の姿も見えなければ、卓や椅子の備へ付けもありません。八戒は不審に思ひながら、尙ほも奧へ進んで行くと、廳の後には一座の樓があつて、入口の戸の半ば開いた陰に、黄綾の帳が垂れて居る。八戒はつか〳〵と上つて

行つて、帳へ手を掛けて披いて見ると、思はずぎよつとして後へ下つた。帳裡には象牙の牀があつて、其の上に一堆の骸骨が轉がつて居るのでした。よく〳〵見ると、其の骸骨は髑髏の大さが巴斗位もあり、腿骨の長さが四五尺もあつて、生前には餘程の偉人であつたらうと思はれる。八戒は心の中に何れかの大將軍の遺骸でもあらうと思ひながら、范然と立つて居ると、帳の後から火の光が射して來たので、急に帳の後へ廻つて見ました。初めは此の大將軍のために香火を手向ける人でもあるのだらうと思つたが、其處には人の影もなくて、只卓の上に幾件かの錦繡の綿衣が置いてあるばかりでした。八戒は進み寄つて、其の中の三件を取り、喜び勇んで樓を下り、門外へ出て、三藏に中の樣子を詳しく話し、手に持つた綿衣を見せて、『幸ひ室の中に此胴衣がありましたから、此寒さを凌ぐには丁度よいと思つて持つて來ました。さア、師父、これを下に召していらつしやい。』

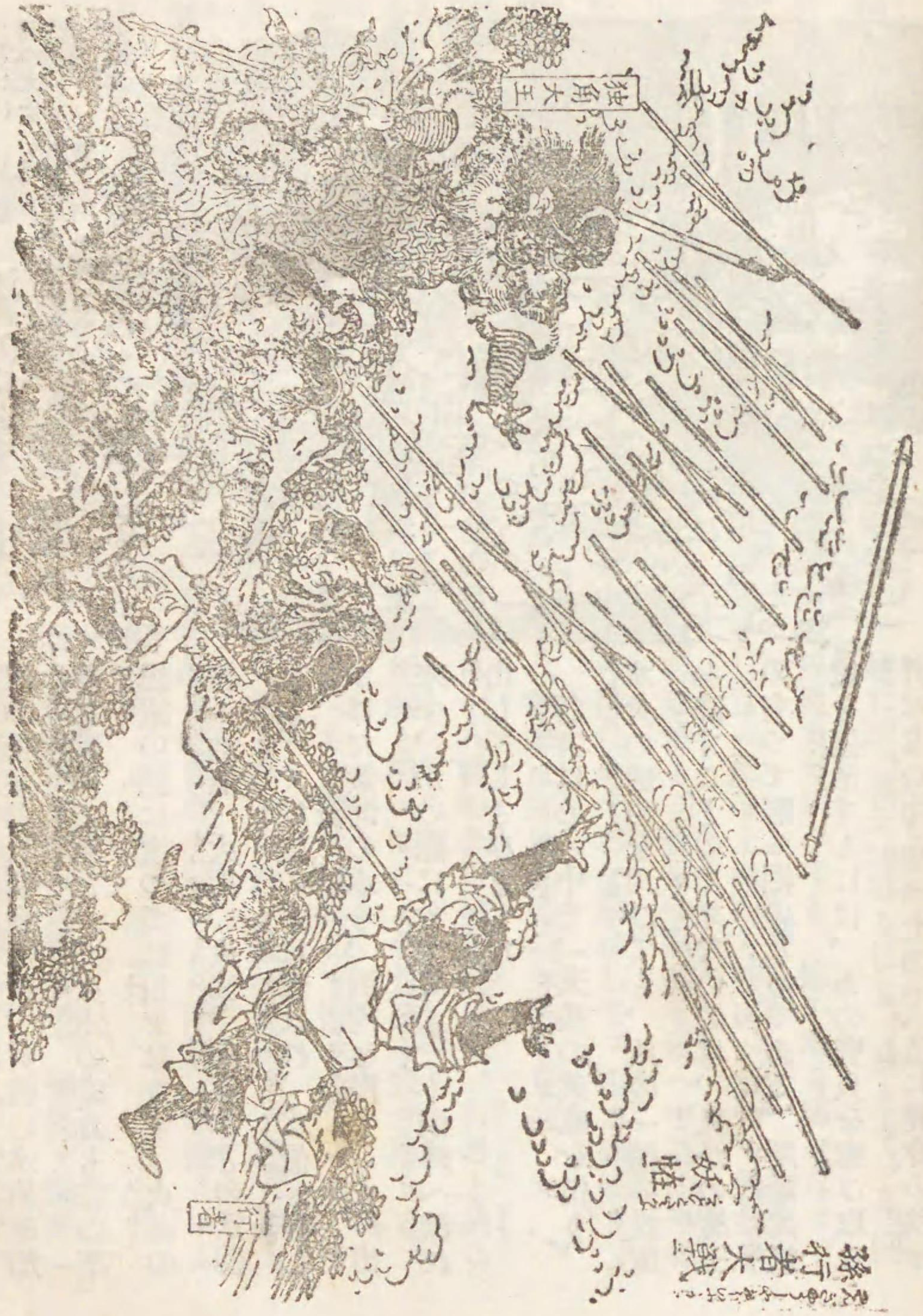
と言つたが、三藏は八戒を誡めて、『假令人は居らなくとも、無斷で物を取つて來れば、窃盜の罪は免れない』といつて、手にも觸れないので、八戒と沙僧は上へ着た直綴を脫いで、各〻胴着を膚へ着たが、まだ帶も締めきらぬうちに、胴着は忽ち繩

と變じて、兩個を縛り上げてしまひました。三藏は驚いて解かうとしたが、繩が兩個の身に食入つて解けさうにもない。其の時門内から一個の妖怪が現はれて、小妖に分付けて唐僧師弟を白馬と行李と共に洞中に運び込ませると、今迄の樓臺は俄かに消えて影も形も見えなくなりました。

暫らくして行者は一鉢の齋飯を化うて、雲を飛ばして元の處へ行つて見ると、師弟の姿も見えなければ、先刻まであつた樓臺の形もないので、行者は心中に早くも師父の難に遭つたことを察し、鉢を抱へて殘念がつて居ると、忽ち前面に一個の老翁が現はれました。これは此の山の土地神でしたが、行者に此の山の妖精の事を告げ、齋飯の鉢を預かつて回りました。老翁の話によると、此の山は金兜山といひ、山中に金兜洞といふ洞があつて、獨角兕大王と呼ぶ魔王の住所になつて居るといふので、行者は直に如意棒を側挾んで金兜洞へ向ひましたが、此の魔王は銀色の光を放つ不思議なる圈を有つて居て、行者が如意棒を變じて幾千の鐵棒として小妖們を逐散らすと、魔王は其の圈を抛り上げて、見る間に如意棒を其の手に收め、行者の呆氣に取られて退くのを見て、悠々と洞の中へ引上げました。

山神化老翁
告唐僧横難

行者は如意棒を妖魔に奪はれて空手になり、山上へ退いて思案に暮れて居たが、急に觔斗雲に飛駕つて天上に上り、此の趣を玉帝に奏上げて、托塔天王父子の援を借り、別に兩個の雷公を加勢に賴んで來て、再び魔王と戰つた。けれども天兵の威力も、妖魔の有つた不思議の圈には刀向ひ難く、妖魔が一たび其の寶貝を抛り上げると、如何なる物でも、自然に其の手へ落ちて行くので、流石剛勇の哪吒太子も、砍妖劍、斬妖刀以下六般の兵器を悉く敵に奪はれ、赤手になつて山上へ引上げました。其處で行者は更に天上に上つて、火德星君に相談して部下の火神を率ゐて加勢に來て貰ひ、



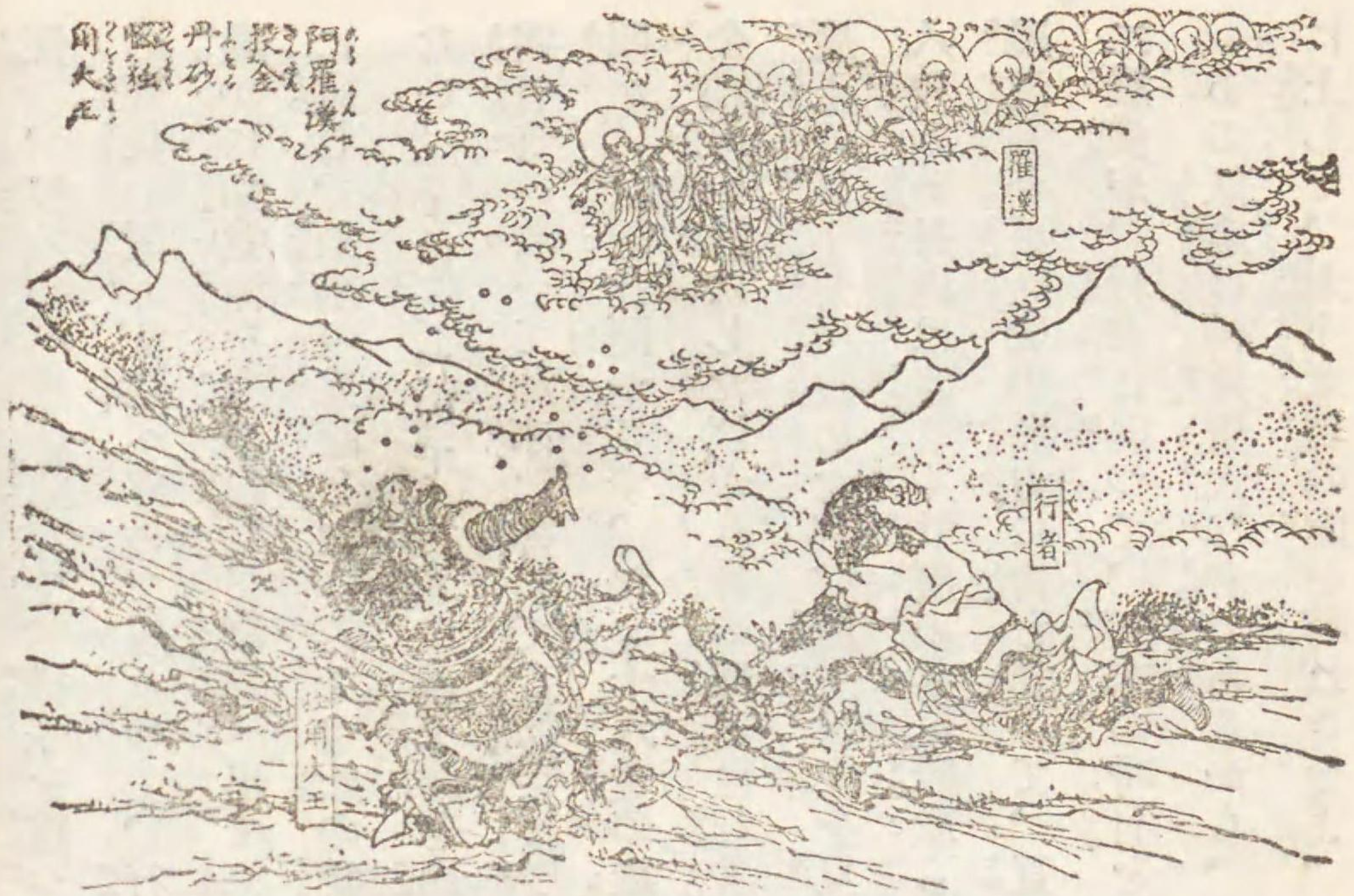
孫行者大戰妖怪

又水徳星君に面會して、黃河の水伯を加勢に賴んで來たが、火水の威力も彼の不思議の圈に遭つては用をなさず、火神の使ふ火龍、火馬、火鴉、火鼠などの武器は悉く妖魔の手に奪はれ、水伯が落しかけた黃河の水も、洞内を浸すことが出來ず、かの圈に會つて悉く洞外へ流れ出してしまひました。

行者は心の中で『天兵の武威を借り、水火の威力を用ひても、此の一個の妖魔を降すことの出來ないのは、只かの魔王の有つて居る圈のためである。所詮此妖魔を退治するには、あの寶貝を奪ひ取る外はない』と思つたので、急に變身の法を

使ひ、洞の中へ忍び込んで、樣子を窺つて居たが、魔王は寢るにも、起きるにも、例の寶貝を緊りと腕へ穿めて居るので、行者の通力を用ひても、偸み取る隙がなく、纔かに如意棒を奪ひ返して洞外へ出て來ました。『此の上は西方靈山へ行つて佛如來に謁し、如來の慧眼をたのんで、此の妖魔の素性と、寶貝の由來を敎へて貰ふ外はない。』と思つたので、行者は諸天神を山上に待たせて雲を飛ばして、西方に到り、雷音寺へ着いて如來を拜して、始終を語ると、如來は直に妖魔の本性を見破つた。明かには說き聞かさず、たゞ十八尊の羅漢に十八粒の金丹砂を授けて、行者と共に金峴山へ遣はした。十八尊の羅漢は行者が妖魔と戰ふ間に、金丹砂を投げ降して、魔王の足下を陷沒めたが、魔王は之を見ると又もや圈を取出して抛り上げると、十八粒の金丹砂は悉く妖魔の手へ吸取られてしまひました。是れを見て、諸天神も羅漢も今更妖魔の通力に舌を卷いて、互に顏を見合せて居ると、降龍、伏虎といふ二羅漢が、行者に向つて、如來の吩付を傳へ、

『あの妖魔は神通廣大な者であるから、若し金丹砂を失つた節には、悟空を離根に上して、太上老君の處を尋ねさせよ、との仰せでした。』といふ。



之を聞くと行者は直に雲を飛ばして天上に上り、離恨天兜率宮へ行つて、老君に詮議の次第を話し、室々を尋ねて、牛欄の前まで行くと、一個の童子が眠つて居て、欄の中には青牛の姿が見えません。行者は之を見屆けて、直に老君の許へ回り、

『あなたは牛を何處へ逃がしました？』と尋ねるので、老君は驚いて牛欄へ來て見ると、如何にも青牛が居ないので、

『畜生、何時の間に逃げたらう？』と叫ぶ。其の聲で童子は眼を醒まして、これも吃驚して、老君の前へ跪きながら、

『前日丹房の中で一粒の丹を拾つて吃べますと、急に睡くなつて、何も知らずに睡つ

てしまひました。誠に申譯ない事を致しました。』といふ。

『あの丹は一粒を吃へば、七日の間は醒めないから、畜生、其の間に下界へ走つたものと見える。』と老君は言つたが、急に室の中を見廻して、『や、畜生、俺の金鋼琢を偸んで行つた。あれは幼い頃から煉成げた寶で、如何なる兵器でも、水火でも、あれには近づけないのだ。若し芭蕉扇を持つて行かれたら、俺の手にもおへない所だつた。いや危い所〳〵。』と言ひながら、芭蕉扇を取つて、兜率宮を出掛けました。

老君は行者と同伴つて金兜山へ着くと、先づ行者に吩付けて妖魔を誘ひ出させました。行者は洞口へ行つて、妖魔を呼び出し、其の姿を見るや否や、急に拳を振つて跳びかゝり、横臉を一打ち打つて、跑け出したので、妖魔は鎗を舞はして赶つて來る。其の時山上から大聲に、

『牛兒よ、何時まで歸らずに遊んで居るのか？』

と呼ぶのが耳へ入つたので、妖魔は驚いて山上を見上げると、思ひがけない主人の老君が立つて招いて居るので、其のまゝ其處へ立竦んでしまふ。老君は口中に呪文を唱へながら、芭蕉扇で一搧ぎすると、妖魔は圈を老君に投返し、又一搧ぎすると忽

ち、本相を現はして一頭の青牛となりました。老君は金鋼琢に仙氣を吹き掛けて、怪物の鼻へ貫し、帶を解いて、其の圈へはめたが、やがて諸神に挨拶して、ひらりと青牛の背に跨り、帶を手に執つて、天上へ回つて行く。之を見送つて、行者は諸神と共に洞へ入り、小妖們を悉く打殺して、魔王に奪はれた兵器を取り收め、諸神の勞を謝して送り回した後、三藏、八戒、沙僧の縄を解き、馬と行李を牽つて洞を出ました。程なく大道へ出ると、路傍から呼ぶ者があるので、一同が驚いて其の方を見ると、それは

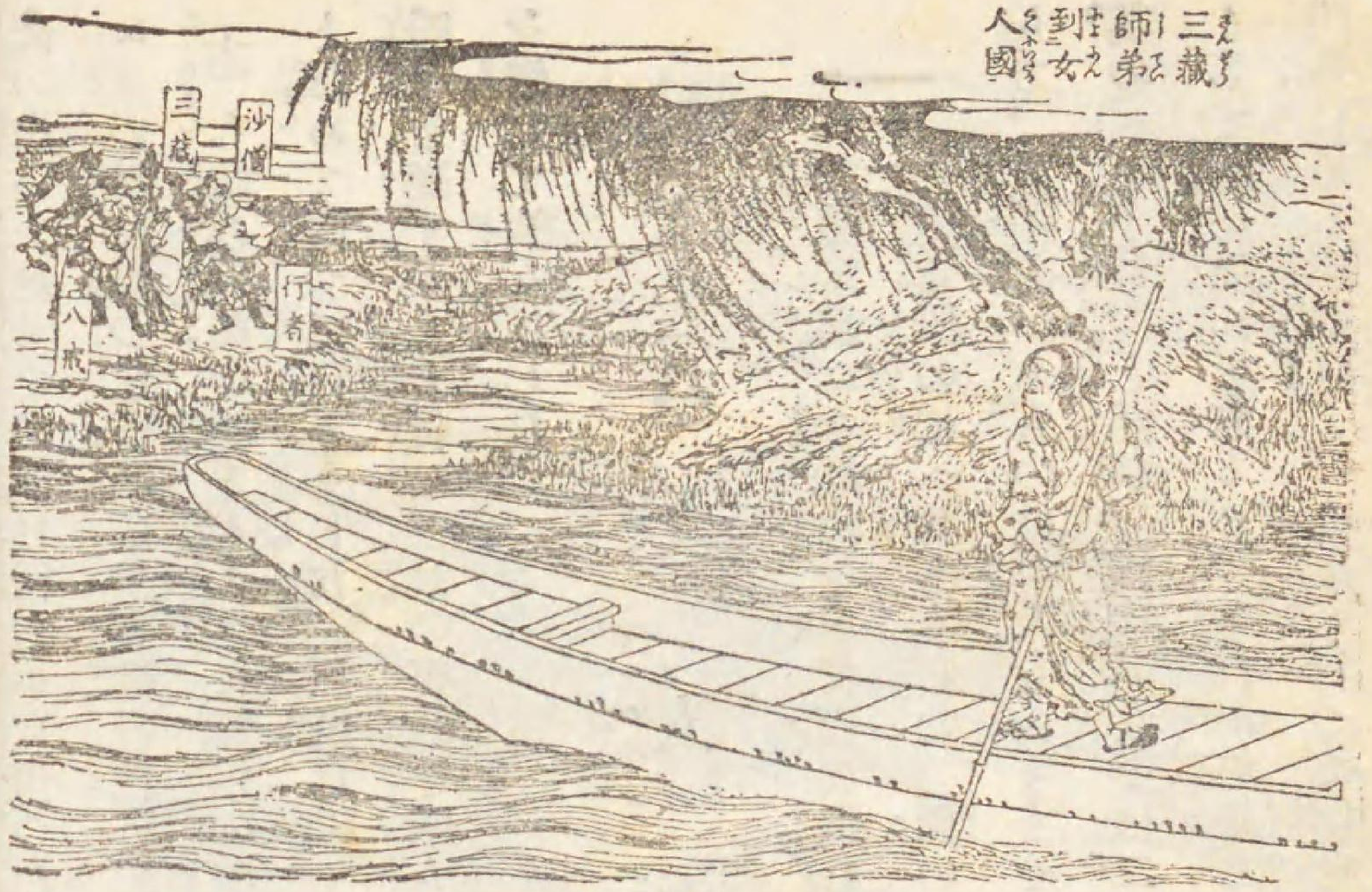
此の山の土地神で、前日行者から預つた鉢を捧げて三藏の前に歩み寄り、『此の鉢に盛つた齋飯は、大聖の化うて來られたものです、之を吃して大聖の厚い志を味ひ、此の後とも大聖に無用の勞苦を掛けぬやうに御注意なさい。』と誡めて回つて行きました。三藏は深く心に慚ぢ、行者に向つて、今後は必ず汝の吩付を聽くからと言ひ、鉢の齋飯を四人に分けて吃つた後、又もや馬に上つて、西を指して進みました。

（八）女人國

三藏師弟は金峴山を出て西に進むうちに、冬も過ぎて、春の初めとなり、西梁女國の地へ入りました。此の國は有名な女人國で、國中の民は女子ばかりで、男子といふものは一人もありません。此の國の東境に一條の小河があつて、其の名を子母河と呼び、國中の女子は二十歳を越すと、必ず此の河の水を飲み、暫くして腹が痛んで來ると、それが姙娠した徴候で、三日經つて王城外の迎陽館驛の門外にある照胎泉といふ泉へ行つて影を寫し、雙影が水に映れば、愈々孩兒を生

女人國

三藏師弟到女人國



むことに定まる。又王城から南へ三千里ばかり行くと、解陽山といふ高山がある。山中に破兒洞といふ洞があつて、此の洞の裡に落胎泉といふ泉がある。若し孩兒を生むことを嫌ふ者は、此の泉の水を飲んで墮胎することになつて居ます。

さて三藏師弟は子母河へ來て、稍公を呼ぶと、一個の老婆が船を岸へ寄せて、掉を取つて、西岸へ渡しました。三藏は幾文かの錢を老婆に與へて岸へ上つたが、不圖見ると、河の水が如何にもよく澄んで居るので、何の氣なしに八戒に命じて一鉢の水を汲ませ、八戒と半分宛飲みましたが、暫く行くと、三藏は急に腹痛を

催して、馬から落ちぬばかりに悶へ苦しむと、八戒も同じやうに腹を抱へて轉び廻る。行者と沙僧は此の有様を見て途方に暮れて居たが、やう／＼二個を扶けて人家のある處まで辿り着き、一軒の家の門口へ來て、三藏を馬から抱き下し、其處に居た老婆に仔細を話して『熱い湯を一杯貰ひたい』と賴むと、老婆は腹を抱へて笑ひ出し、子母河の由縁を語つて『それは妊娠したのだから、熱い湯を飲んでも治らない』といふのでした。三藏は然う聞いて見ると、如何にも腹の中に何か塊のやうなものがあつて、手で撫でると、ことく／＼と動く様子なので、大に當惑して居ると、八戒も此話を聞いて

三藏八戒淩河水懐鬼子

急に心細くなり、兩眼から涙を流して泣き悲しみました。其のうちに老婆が、落胎泉の事を話すのを聞いて、行者は直に解陽山へ雲を飛ばし、泉の水を汲んで來て雨個に飲せたので、やう／＼の事で腹の塊も融け、疼痛も止まり、其の夜は老婆の家に一泊して、翌朝早く此の村を出立しました。

其處から三四十里行くと一つの城下へ着きました。これが即ち西梁女國の王城のある處で、師弟が東門の入口へ進むと、多數の市民が忽ち前後を取圍んで、珍らしさうに見物するのが、何れも婦女で、男子は一人もありません。其のうちに女の官人が來て、四人を城門外の官舍へ案内する。三藏は官舍の門を見上げると、「迎陽館」の三字を表した額が掲げてあるので、昨日の老婆の話を思ひ出しながら内へ入り、女官に通關文牒を見せて執奏を頼むと、女官は四人に食事を勸めるやうに係りの官人に命じて置いて、衣冠を整へて王宮へ出向きました。三藏師弟は迎陽館で齋飯を吃して、女官の消息を待つて居ると、少時して女官は宮中の大官らしい婦人と同伴つて回つて來て、三藏の前へ跪いて禮拜し、

『唐朝の御弟爺々、先づ以て御慶を申述べます。』といつたが、三藏が何の譯と

も知らず不審な顔をして居るのを見て、女官らは言葉を續ける。『此國は西梁女國と申して開闢以來男といふものを知らない處でありますが、今幸ひ御弟爺々の御降臨がありましたので、女王の仰せられるには、是非とも御弟を王として全國を讓り、御自分は皇后となつて、王位を子孫に傳へたいから、汝等宜いやうに計らへとの事でございます。若し御承諾ある上は、女王が御自身にお迎へとして此處まで駕を枉げさせられる筈でございます。』

三藏は之を聞いて、心中に「さては又々難儀が降りかゝつた」と思ひ、當惑して啞のやうに默つて居たが、女官らが頻りに返事を促すので、三藏は行者に向つて、

『悟空、汝は何と思ふか？』と尋ねる。

『老孫の考へでは師父には此處へお止まりになつて、我們三人が西天に行つて經を取つて來るのをお待ちになつたらよろしからうと思ひます。』と行者は答へる。

斯う言つて、行者は三藏を差置いて、女官らに承諾の返事をしたので、女官らは喜んで王宮へ立回りました。其の後で三藏は行者に向つて、

『此の猴め、他を弄具にするつもりか。』と罵しる。『俺を此處へ置いて、汝們が西天

へ行つて佛を拜するとは何事だ？　俺は死んでもそんな事はしないぞ！』

『師父、決して御焦慮なさいますな。師父の性情は老孫がよく存じて居ります。』と行者は三藏を宥めて言つた。『只今あゝ申しましたのは、此の難題を切拔ける一時の方便です。あゝ言つてやりましたからは、今に女王が城を出て、皇帝の禮を以て師父を迎へに參るでせう。其の時師父は辭退せずに龍車へ上つて城へお入りなさい。而して女王に勸めて、直に我們三人を召し出し、關文牒に印を捺して交付させて下さい。で、我們が愈〻出立するといふ際に、師父は女王を賺して、『兎に角徒弟們を城外まで見送つて置いて、城へ回つてからゆつくり婚姻の禮を擧げることにしよう』と仰しやれば、女王も喜んで送つて來るに相違ありません。さて城を出たら、師父が車を下りるのを合圖に、老孫は定身の法を使つて、君臣一同を動けないやうにしますから、沙僧は師父を馬に上せて急いで出掛るのです。而して一晝夜も行つてから法を解けば、双方共に無事で、此の難を切拔けることが出來るではありませんか。』

三藏は行者の計略を聞いて、掌を拍つて喜び、やつと安心して待つて居る中に、女官を先導として、女王が自身で三藏を迎へに來たので、三藏は言はれるまゝに女

王と並んで龍車に駕り、行者、八戒、沙僧の三人は、白馬を牽いて、其の後から城へ向ひました。

さて城へ着くと、殿中にはもう酒宴の準備が出來て居て、すぐに祝賀の宴を開きましたが、少時すると、三藏は女王に勸めて、關文を換へさせて、女王と一緒に龍車に駕つて、三個の徒弟を城外まで送りました。やがて西門の外へ出ると、行者は立停まつて、龍車の方に向ひ、

『女王様、此處でお別れ致します。』と言ふ。

之を聞くと、三藏は急に龍車を下り、女王を振返つて、

『陛下はお回りなさい、貧僧は經を取りに參ります。』

と言ふや否や、沙僧に扶けられて白馬に上らうとする。女王は此の有樣を見て、驚いて、

『御弟には何でお心を變へられたのか？』

と言ひながら、三藏の後から龍車を下りようとした。其の時群集の中から一個の女子が、突と三藏の傍へ走り寄つて、

琵琶洞の女怪三藏を攝去る

『唐僧、何處へ行くの？ さ、私が好い處へ連れて行かう。』

と言ふかと思ふと、忽ち風を起して、三藏を攫つて行つてしまひました。

此時行者は、豫ての計略通り、定身の法を使はうと思つて居ると、急に群集の中から沙僧の叫ぶ聲が聞えたので、驚いて其方を見ると、三藏の姿が見えない。行者は直に覺つて雲に跳駕つて四方を見渡すと、一陣の風が塵を卷いて西北の方へ走つて行くので、雲の上から大聲に、

『兄弟、早く雲に駕つて續いて來い！』

と叫んで其の後を追つて行く。八戒、沙僧も、白馬を牽き、急に雲を飛ばして行者の後に續いたので、之を看た西梁國の人々は、一同地に平伏して其の後姿を拜し、

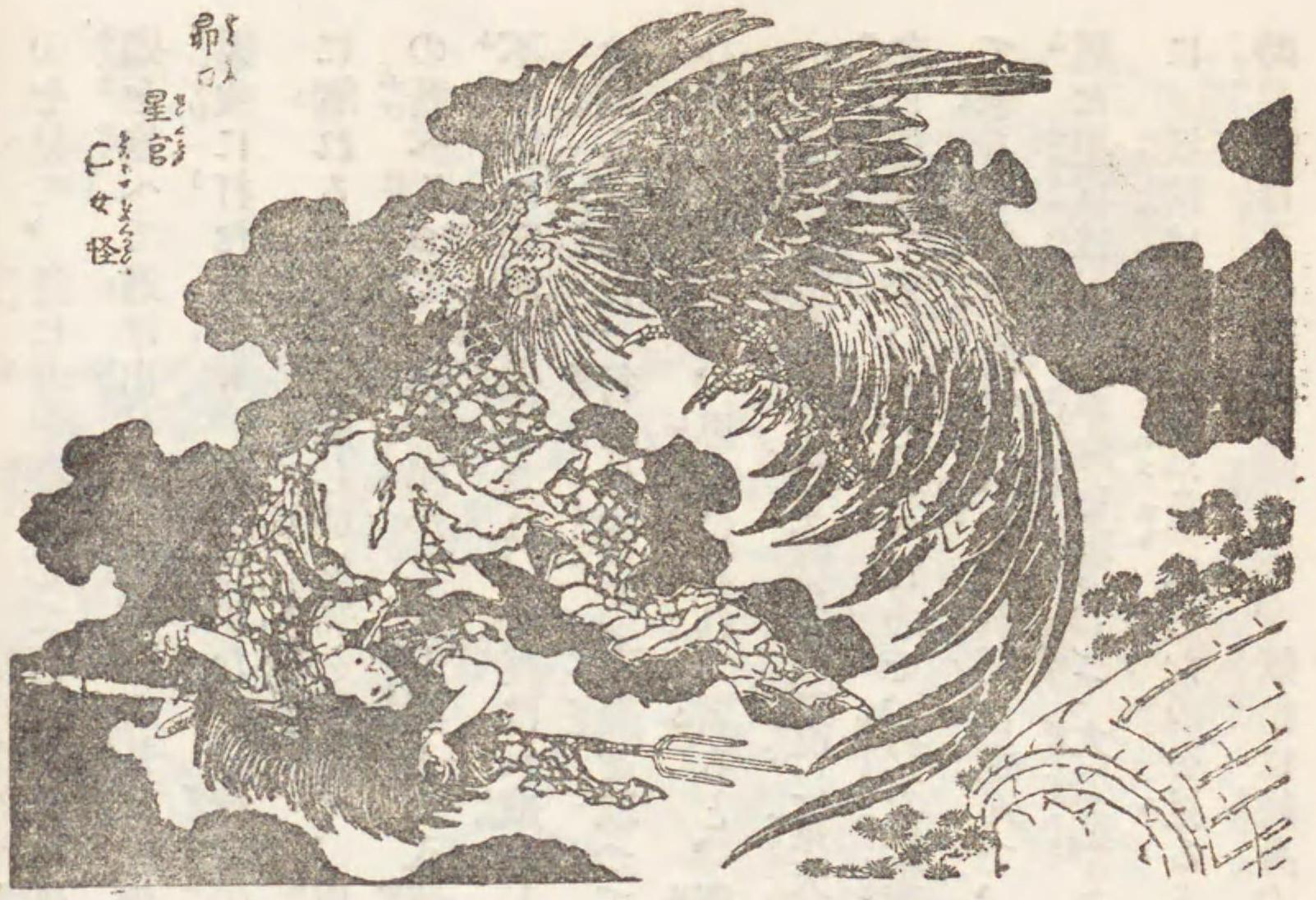
『さては尋常の僧ではなかつたのか。白日昇天の羅漢であつたのか。』

と一齊に感歎の聲を擧げて、城内に引返しました。

さて行者は、雲を飛ばして赴つて行くと、一座の高山へ來て、風も塵もふつと消えてしまつたので、雲を下りて山中を尋ねると、忽ち目の前に一個の青い石が屏風のやうに立つた處へ出た。試みに其の後へ廻つて見ると、其處には思ひ掛けな

く一つの石門があつて、門の上に「毒敵山琵琶洞」といふ六箇の大字が刻んである。此の時八戒、沙僧も雲を踏んで追つて來たので、行者は二個を洞の外に待たせて、一匹の蜜蜂になつて中の樣子を窺ひに行きました。行者は二層の門を越えて、座敷へ入ると、一個の女怪が上座に坐つて、多くの女童を左右に列べ、三藏を中へ取圍んで、難題を言ひかけて困らせて居るので、行者は急に本相を現はして、いきなり女怪に打つてかゝると、女怪は口から一道の烟りを噴き、三股の戟を執つて洞外へ跳出し、行者を相手に戰つたが、八戒が釘鈀を提げて跑けつける

のを見て、急に身を躍らして行者の頭を何かで刺したと思ふと、行者は呀と言つて、頭を抱へて逃げ出しました。其の昔八卦爐の中で煉鍛へて以來、刀鎗に遇つても、雷火に打たれても、傷がつかない、行者の自慢の石頭も、此の女怪の不思議の武器に觸れると共に、劇しい疼痛を覺えて、思はず敗北したので、八戒、沙僧と共に山の蔭へ入つて一夜を明かし、翌朝また八戒と同伴つて洞門に向つたが、又もや敵の不思議の武器に惱まされ、今度は八戒がしたゝかに唇を刺されて、元の場所へ逃げ回りました。行者は再度の不覺を取つて、洞外に退き、師父を救ひ出す手段を思ひ廻らしながら、思案に暮れて居ると、圖らず空際に觀音菩薩が現はれ、行者を招いて、妖精の素性を說き聞かせ、『直に東天門に上り、光明宮へ往つて、昴日星官を加勢に賴んで來い』と敎へたので、行者は雲を飛ばして東天門に上り、昴日星官を請じて來る。行者と八戒は先づ洞門に進んで、女怪を誘き出すと、屛風岩の後に隱れて居た星官は、忽ち本相を現はして大公鷄となり、妖精に向つて一聲高く叫ぶと見る間に、妖精は忽ち本像を現はしたのを見ると、琵琶位もある一匹の蠍子でした。其の時星官は又一聲高く叫ぶと、妖精は總身ぐた〳〵になつて、死んだやうに倒れてし



まつた所を、八戒が釘鈀を擧げて微塵に突碎きました。其處で星官は此の女怪が蠍子の精であつたことを語り、其の使ふ三股叉は二本の鉗脚、かの不思議の武器は倒馬毒と言つて、其の尾の上にある鈎子だと敎へ、且行者と八戒を呼んで、女怪に刺された傷を一摸摸て氣を吹きかけると、餘毒が忽ち解けて、拭つたやうに疼みが消えました。やがて三人は地に跪いて、星官の雲に駕つて回つて行く姿を見送つた後、洞へ入つて見ると、配下の女們は、一同三人の前に平伏して、『私共はすべて西梁國の女子で、あの妖精に攫はれて來た者です。決して怪しい

者ではありません。何卒此の上のお慈悲には、一同の命を助けて、家へ歸らしていただき度い。』と言つて訴へる。

行者が仔細に査べて見ると、果して妖怪ではないので、一同を放して國へ歸らせ、奥へ入つて三藏を救ひ出し、一伍一什を物語つた後、洞には火を放けて燒拂ひ、三藏を馬へ乘せて再び西に向ひました。

三　（九）火焰山

三藏師弟は琵琶洞を出て西に進むうちに、夏の炎天も過ぎて、早〳〵も秋の季節となり、朝夕はもう冷々する位になつたので、道も自然と捗どつたが、一日一個の村へ差しかゝると、急に蒸し暑くなつて、まるで蒸籠の中へでも入つたかと思ふ程なので、一同は熱い〳〵と言ひながら進んで行く。やがて一軒の立派な門構への家の前まで來ると、中から一個の老人が出て來たので、三藏は馬を下りて禮をすると、老人も忙しく禮を返して、三藏が唐朝の僧で、西天へ經を取りに往く者だと言ふのを聞き、師弟を家へ請じて齋飯を勸めました。三藏は老人に向つて、

此の地方の熱い事を言ひ出して、其の理由を尋ねると、老人は首肯きながら、

『此處には火燄山といふ山がありますので、春といはず、秋といはず、いつも此の通りの暑さです。』と答へる。

『其の火燄山は何の方角に當つて居りますのです？』と三藏が尋ねる。

『此の村から六十里離れて、丁度西方へ行く通路に當つて居りますが、八百里の間悉く火燄で、草も生へません。若し此の山を越えようとすれば、黑鐵の身體でも溶けて水になつてしまふでせう。』

三藏は老人の言を聞くと、もう顏色を變へて、前途の事を心配して居る樣子なので、行者は老人に向つて、

『あなたは今草も生えないと仰有つたが、草の生えない處へ如何して五穀を植ゑるのです？』と尋ねる。

『若し、五穀を植ゑようと思ふ時は、鐵扇仙人の許へ禮物を持つて賴みに行くのです。』と老人が答へる。『仙人は一個の芭蕉扇を持つて居て、其の扇で一度搧げば火が息へ、二度搧げば風を生じ、三度搧げば雨を降らして、五穀の種を蒔けるやうに

して下さるので、私共は毎年一度宛は、必ず猪と羊と酒を持つて、山へ行つて仙人を請んで來ることにして居ります。』

『其の山は何處にあるのです。又山の名は何と喚んで、此處から何の位離れて居ります？』

『山は此處から西南に當つて、名を翠雲山と喚び、山中に芭蕉洞といふ洞があります、里程は千五百里ばかりです。』

行者は之を聞くと喜んで、

『よし〳〵、それでは其の扇を借りて來て、火を煽ぎ息して、此の山を越えよう。』と言ふや否や、雲に駕つて飛んで行つたので、老人は驚いて、天を眺めながら、「さては雲霧に騰つて飛行する神人であつたか」と思ひ、それからは三藏を生佛のやうに敬ひました。

行者は少時して翠雲山へ着き、雲を下りて行くと、一個の樵夫に會つたので、鐵扇仙人の芭蕉洞を尋ねると、樵夫は答へて、

『芭蕉洞は此の山に在りますが、鐵扇仙人といふ者はありません。鐵扇公主といふ

者があります。又の名を羅刹女と言つて、牛魔王の妻です。』といふ。
行者は之を聞くと、胸の中で驚いて「これは大變な奴に出會した。羅刹女と言へば紅孩兒の養母だ。紅孩兒の事で、俺を仇敵と思つて居るに相違ないから、扇を借せと言つても借す筈はない」と思つたが、「まア、此處まで來たのだから、一つ當つて見ろ」と思案を定め、樵夫に別れて、直に芭蕉洞へ行きました。
羅刹女は孫悟空の名を聞くと、果して烈火の如く憤り、二口の寶劍を左右の手に提げて、洞門の外へ跳り出し、問答にも及ばず砍つてかゝるので、行者も棒を執つて交戰ひ、夕景まで戰つたが、羅刹女は到底勝てぬと見て取つて、芭蕉扇を取るより早く行者に向つて一搧ぎすると見る間に、行者の身は風に卷かれる木葉のやうに、虚空遙かに舞ひ上つて、漂ふこと一夜にして、天明方にやう〳〵一座の高山の頂に止まりました。行者は山の上に立つて、よく〳〵山の樣子を見究めると、前に黃風怪を退治する時に、靈吉菩薩を迎へに來て、見覺えのある小須彌山に相違ないので、「爰へ來た序に、菩薩に對面して、火燄山からの行程を問うて見よう」と思ひながら、山を下つて、菩薩の禪院へ入つて行きました。

悟空　芭蕉扇　羅刹女

靈吉菩薩は行者が羅刹女の芭蕉扇で搧ぎ飛ばされた話を聞くと、大に笑つて、

『あの芭蕉扇は混沌の初めて開けた時、天地の間に生じた靈寶で、人を搧ぐ時は、一搧りに八萬四千里を漂はす奇特がある。火燄山から此の山までは只五萬里しかないが、大聖が此處で止まつたのは、全く雲を留める力を有つて居られるために相違ない。』と言つたが、急に思ひついたやうに、『當年如來が一粒の定風丹と一柄の飛龍杖を授けて、唐僧を守護せよとの仰せであつた。飛龍杖は黄風怪を降す時に用ひたが、定風丹はまだ一度も用ひなかつた。今度は之を役に立てよう。之さへ持つて居れば、搧がれても飛ぶやうなことはない。』

と言つて定風丹を取出して行者に渡したので、行者は押頂いて頸に縫ひ込み、菩薩に別れて、觔斗雲に駕り、瞬くうちに翠雲山へ取つて回しました。

此の時羅刹女は心の中で「流石の孫悟空も、あゝして芭蕉扇で搧いでやつたからは、當分回つて來る氣遣ひはあるまい」と思ひながら、女童を相手に洞の中で打寛いで話して居ると、忽ち洞門を破れるばかりに打敲く音がすると思ふ間もなく、女童が轉げ込むやうに入つて來て、

『昨日の人が又扇を借せといつてまゐりました。』と告げる。

羅刹女は之を聞くと思はず身を竦めて、

『あの猴め、どんな妙術を有つて居て、今の間に、八萬四千里の道を回つて來たのか？』と言つたが、『よし、今度は續けて兩三扇搧いで、回れないやうにして呉れよう』と又も二口の寶劍を兩手に提げて洞外に跳り出で、行者の鐵棒と交戰つて、六七合戰ふ間に、芭蕉扇を取出して、行者を目がけて一搧ぎしたが、不思議や行者は端然として更に動かず、續けて二三回搧いで見ても、愈々動く氣色もないので、羅刹女は驚き慌てゝ洞の中へ逃げ込むと、門々を緊しく闔してしまひました。

行者は之を見て、急に身を變じて小さな羽蟲となり、門の隙間から飛び込んで行くと、羅刹女は息を切らして、女童の運んで來た茶を飲まうとする所でしたから、行者は突嗟の間に茶椀の中へ飛込み、沫と一緒に羅刹女に飲まれました。行者は羅刹女の腹の中へ入ると聲に急を出して、

『嫂々、扇子を借して下さい！』といふ。

羅刹女は驚いて、四邊を見廻しながら、

『全體何處に居てそんな事を言ふのか？』と尋ねる。

『あなたの腹の内に居るのです。』と行者は答へるや否や、腹の内で跳り出したので、羅刹女は床の上を轉げ廻つて苦みながら、

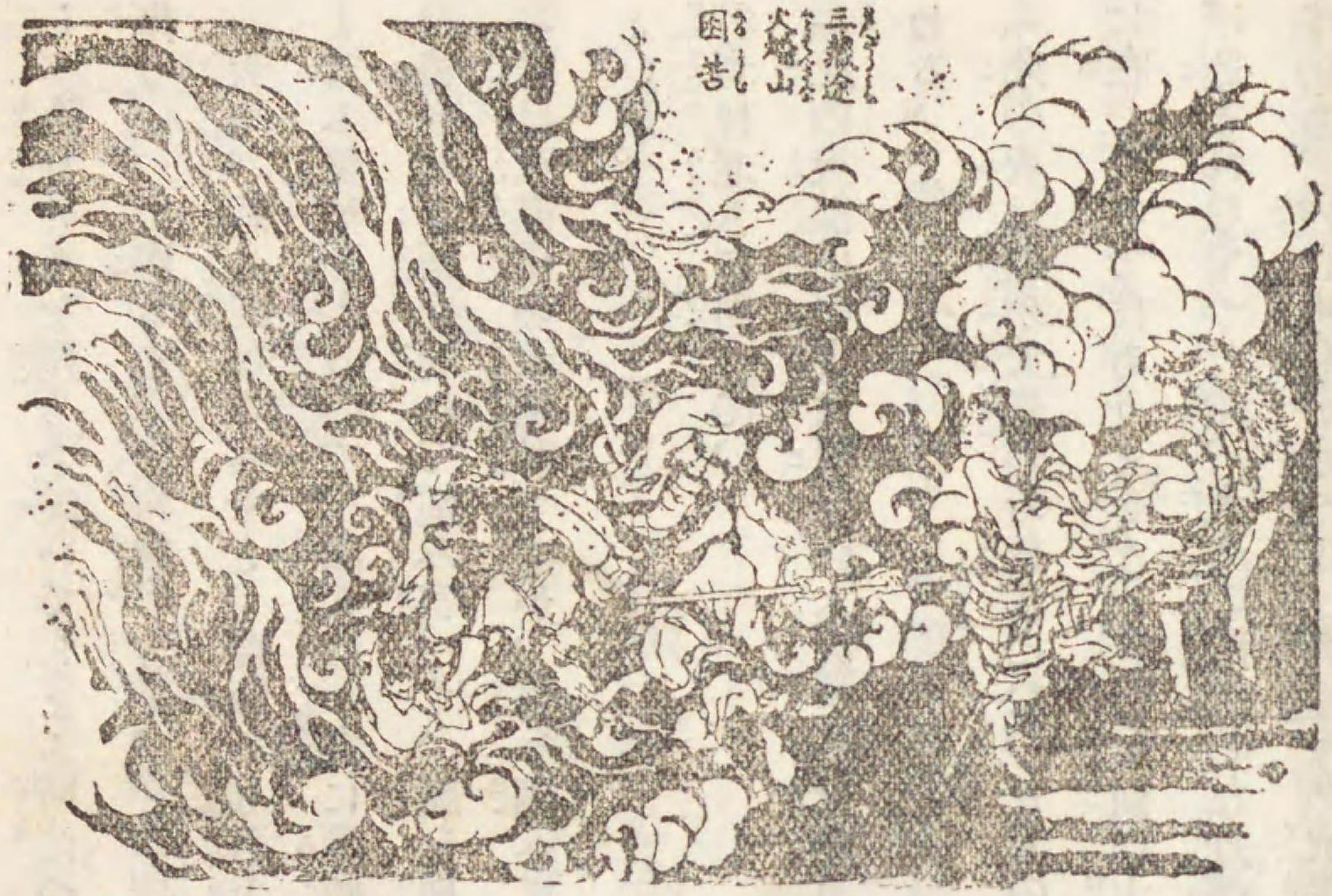
『疼い〳〵、死んでしまふ。』と叫び立てる。『扇を借すから、命だけは饒して下さい。』

斯う言つて女童に命けて芭蕉扇を持つて來させるのを、行者は咽の中で見屆けながら、羽蟲になつて口から飛出すと、忽ち原身を現し、扇を受取つて洞外へ跑出し、雲に駕つて三藏の許へ回りました。

三藏は行者が芭蕉扇を持つて回つて來たのを見ると、大に喜んで、直に老人に別れを告げて出立したが、四十里ばかり進むともう熱氣が烈しくなつて、一歩も進めない程になります。行者は三藏に向つて、

『師父、且らく馬を下りて待つて居て下さい、弟子がこれで搧ぎ息しますから、雨風が過ぎてからゆつくり山を越すことにしませう。』

と言つて、扇を持つて火の燃えて居る邊へ近づき、力任せに一搧ぎすると、山上の



火光は見る間に旺んになり、二度三度搧ぐうちに火は愈々燃え擴がり、果は千丈の高さに燃え上つて、行者の上に落ちかかつて來るので、行者は兩股の毛を焦がしながら慌てゝ三藏の前へ跑け戻り、

『早くお逃げなさい、早く！早く！火が燃えて來ます。』と叫び立てた。

沙僧らは急いで三藏を馬にかき乘せ、二十里ばかりも逃げ戻つて、やう〳〵息を繼いだが、行者は忌々しさうに扇を抛り出して、

『いや、驚いた〳〵、畜生、我輩を騙して、僞物を摑ませやがつた』と言ふ。『搧げば搧ぐ程火が燃え立つて來て、もう少

して全身の毛を殘らず燒いてしまふ所だつた。』
斯ういつて居ると、忽ち後の方で、
『大聖、御心配なさらずと、齋飯でも召上がつて、ゆつくり御相談なさい。』
と言ふ聲が聞えるので、四人は一齊に看囘ると、一個の老人が、頭の上へ銅の鉢を載せた小厮を連れて進み寄つて、腰を屈めながら、
『私は火燄山の土地神ですが、齋を調へてまゐりましたから、何卒お受け下さい。』
といふ。
行者は老人に向つて、
『此の火燄山の火は何ういふ火か？又此の火は何時になつたら消えるのか？』と尋ねる。
『此の火は原來大聖のお放しになつたものです。といふ譯は、此の山は原から此處に在つたのではありません。五百年前に大聖が、天宮を鬧がして、老君の八卦爐へ投げ込まれなすつた時、大聖の踏倒した丹爐が、地へ降つて此山になつたのです。ですから、内に火氣が殘つて、此通りの火燄を吐くのです。私は其の時、八卦爐を

司る道士でしたが、老君は私の怠慢を責め、下界に降して、火燄山の土地神にしました。』と老人は火燄山の由來を語つた後、『さて此の火を滅するには、羅刹女の芭蕉扇を借りて來るより外はないのですが、今大聖がお持ちになつた扇は眞實ではありません。眞實の芭蕉扇を手に入れようと思召したら、牛魔王に會つてお求めになるのが一番です。けれども牛魔王は今では羅刹女を棄てゝ、積雷山摩雲洞の玉面公主と同棲して居りますから、牛魔王にお會ひになるには、摩雲洞へお出でにならなくてはなりません。』
行者は此の話を聞いて、土地に向つて積雷山の所在を尋ねると、此處から南方へ三千里行つた處だといふので、八戒と沙僧に師父の守護を命じて、雲に駕つて摩雲洞へ向ひました。

(二〇) 牛魔王

行者は觔斗雲に駕つて一飛に積雷山へ着き、雲を下りて松林の中を進んで行くと一個の石門があつて、門上に「積雷山摩雲洞」の六字が鐫着けてある。

行者は門外に立つて、中の様子を窺つて居ると、不意に門が開いて、中から一個の美人が出て來る様子でしたが、行者の顔を見ると、吃驚したやうに門を閉めて奥へ跑け込んでしまひました。すると牛魔王は鐵棍を提げて、洞の外へ出て來たが、行者を見るや否や、紅孩兒の事を言つて罵るのを、行者は如才なく受け流して、芭蕉扇の事を言ひ出すと、牛魔王は大に怒つて、急に棒を揮つて打つてかゝる。行者も如意棒を取つて交戰ひ、百餘合に及んで、まだ勝負の見えない所へ、忽ち山上に人の聲がして、

『牛大人、大王がお待ち兼ねです。何卒一刻も早くお越し下さい。』といふ。

牛魔王は之を聞くと、俄に戰を罷めて、行者に向ひ、

『悟空、朋友の所へ招かれて居るのを忘れて居た。一寸行つて來るから、回るまで待つて呉れ。』

と言ひ棄てゝ洞の中へ入つてしまひました。

行者は峰へ登つて様子を窺つて居ると、牛魔王はやがて碧水金睛獸に跨つて、雲を起して、西北の方へ飛んで行くので、行者も一陣の風となつて跡を追つて行くと、

程なく一座の山中へ來て、牛魔王の姿を見失つてしまつた。行者は原身を現はして、山中へ入つて行くと忽ち一條の河があつて、淵の邊に、「亂石山碧波潭」といふ六字を顯した石碣が立つて居る。行者は一個の螃蟹に變じて、水の底へ入つて行くと、一座の高樓の前へ出た。門を入ると、廊下に金睛獸を繋いで置いて、牛魔王は奥で酒宴をして居る様子なので、行者は卽座に一計を案出し、本相を現はして金睛獸に飛乘るや否や、水上に騎り出し、牛魔王の姿に變じて、直に芭蕉洞へ向ひました。

羅刹女は牛魔王が回つたと聞いて、喜んで洞の外へ跳んで出たが、行者が金睛獸を降りるのを見て、更に疑ふ心もなく、直に手を取つて奥へ連れて行きました。行者は座に着くと、直に羅刹女に向つて言つた。

『聞けば、孫悟空が唐僧を守護して、火燄山の近くへ來たといふ話だが、火燄山を越えようとすれば、必ず芭蕉扇を借りに來るに相違ない。若し來たらば、直に知らせて貰ひたい。引捉へて我兒の仇を報ゐなくては、胸が晴れないから。』

羅刹女はこれを聞くともう、涙を流して、昨日以來の事を話し、僞の扇を借してやつた事まで、細かに語つて居る所へ、女童們が酒肴を運んで來たので、行者は先

づ觴を把つて羅刹女にすゝめ、頻りに酒を注いでやつて、羅刹女が醉つて來た樣子を見究め、扇の所在を尋ねると、羅刹女は笑ひながら口の中から扇を吐き出して、行者の手に渡しました。見ると杏葉位の大きさしかないので、行者は獨語のやうに、

『こんな小さなもので、何うして八百里の火焔を搧ぎ滅すことが出來よう？』

と言ふと、羅刹女は直に聞きつけたが、酒に醉つて居るので、深い思案もなく、

『あら、可笑い！　大王は玉面公主に魂を奪はれて、御自分の寶貝の事までお忘れになつたと見える。』と言つて笑つたが、『左の大指で柄を押へて、呬嘘呵吸嘻吹呼と念じれば、一丈二尺の長さになつて、八百里の火焔を滅す位は何でもないではありませんか。』とうつかり言つてしまふ。

行者は之を聞いて〆たと思ひ、忽ち扇を口の中へ入れるや否や、本相を現はして、洞の外へ跳出して行くので、羅刹女は呆氣に取られて、其の後を見送りながら、暫らくは開いた口も閉がらない程でした。

行者は峰へ跳上り、口から扇を吐き出して、敎はつた通りの呪文を念じると、果

して一丈二尺の長さになりましたが、それを縮める法はつひ聞き洩らして來たので、原のやうにすることが出來ず、大きなまゝに肩へ擔いで、得意になつて火焔山へ囘つて行きました。

此の間に牛魔王は酒宴を終つて碧波潭を出ようとすると、金睛獸が見えないので、さては悟空に謀られたかと覺つて、急に雲を飛ばして芭蕉洞へ行きました。牛魔王は羅刹女から槪略の樣子を聞いて、切齒して悔しがり、直に羅刹女の寶劍を受取つて洞を跳出し、悟空の後を赶つかけました。少時すると、遙かの空に、悟空が一丈二尺の芭蕉扇を擔いで行く姿が見えたので、牛魔王は俄かに一計を案出し、身を八戒の姿に變じ、先へ廻つて行者の前へ立現はれ、聲を掛けて樣子を尋ねるので、行者は得意になつて、一伍一什の事を語り、何の氣もなく扇を八戒の手へ渡しました。

牛魔王は此の時何か口の中で呪文を唱へると思ふと、扇は縮んで杏葉位になるのを、口の中へ呑み込むや否や、本相を現し、寶劍を揮つて砍つてかゝる。行者も大に怒つて、鐵棒を舞はして打ちかゝり、互に中空に立つて喚き叫んで戰ひました。

此の時八戒は三藏の命を受けて、土地神を案内に連れて、行者の消息を見に來た

が、今兩個の戰ふのを見て、急に側面から釘鈀を擧げて突きかゝる。牛魔王は先刻からの戰ひに疲れ果てた上に、俄かに兩方に敵を受けて、終に摩雲洞を指して敗走するのを、行者と八戒は洞の口へ追ひ詰めて、又一しきり戰つた。此の時土地神が陰兵を率ゐて洞の口を塞いだので、牛魔王は終に洞へ入ることが出來ず、忽ち身を變じて一隻の天鵞となつて空へ上る。行者は之を見て、急に一個の海東青となり、天上高く舞ひ昇つて、眞逆樣に天鵞の上へ落して來ると、牛魔王はまた黄鷹に變じて、海東青に向つて行く。行者は忽ち鳳凰に變じて、一聲高く鳴くと見ると、黄鷹は烏王の威に壓されて地へ飛び下つたが、一隻の香獐と變じて、崖の下で草を喰んで居る。行者も續いて地へ下つて、一隻の猛虎に變じて、香獐に跳蒐つて行くと、牛魔王は慌てゝ大豹に變じて虎に向ふ。行者が又狻猊に變じると、牛魔王は人熊になつて之に向ひ、前趾を開いて狻猊を擒へようとする。此の時行者は地へ轉ぶと見る間に、忽ち一隻の大象となり、大蛇のやうな鼻を伸ばして人熊を捲かうとするので、牛魔王は思はず笑つて、終に正體を現はし、一隻の大白牛になりました。其の姿をよく〳〵見ると、頭は峻嶺の如く、眼は閃光の如く、兩隻の角は鐵塔のやうに聳ち、牙は利刀

を列べたやうに尖り、頭の先から尾の先まででは千丈に餘り、蹄から背にかけての高さは八百丈もあります。此の時牛魔王は行者を屹と睨んで、雷のやうな聲を立てて、

『さア何うだ？』と叫んだ。

行者も同じく正體を現はし、一聲高く叫ぶと見る間に、身の高さは一萬丈となり、頭は泰山の如く、眼は日月の如く、眞赤な口を開き、牙を露き、鐵棒を執つて立向ふと、牛魔王は角を揮つて棒を受け止め、山を搖かし、嶺を撼つて戰つた。

此の時いつも三藏の蔭身に添つて、空中から守護して居る神々が、此騷ぎを聞きつけて、一齊に集まつて來て行者に加勢した

ので、牛魔王は忽ち地に轉ぶと、又元の像になつて、芭蕉洞へ逃げ込んでしまふ。行者も之を見て元の像にかへり、神々と一緒に跡を追ひ、牛魔王を洞の中へ閉ぢ込め、神々は神兵を率ゐて、翠雲山を取圍みました。其處へ八戒も土地神を連れて跑けつけて來て、摩雲洞の群妖を退治して、玉面公主を突殺して見たら、一匹の白狐であつたことなどを話し、行者と共々に芭蕉洞に向ひ、釘鈀を擧げて洞門を打破つたので、牛魔王は急に芭蕉扇を吐き出して、羅刹女に渡し、兩口の寶劍を取つて洞の外へ跳り出で、行者と八戒を相手にや〻暫く戰ひました。其のうちに牛魔王は戰ひ疲れて逃げ出したが、四方八面を神兵に取圍まれて、逃げ出す隙もないのを見て、最後に眞直に天上へ飛び上ると、爰にも托塔天王が照妖鏡を取つて待つて居るので、牛魔王は忽ち大白牛の姿になり、兩雙の角を振立て〻突きか〻るのを見て、天王の側に立つた哪吒太子は、三頭六臂に身を變じて白牛の背へ跳上り、斬妖劍を揮つて、其の首を斬り落した。と見る間に、不思議や其の切口から直に新しい頭が出來て、口から黑氣を吐いて向つて來る。斬つても斬つても、後から後からと新しい頭が出來て、果てしがないので、哪吒太子は火輪兒を取つて白牛の脛に掛け、口から眞火を

噴いて牛王を燒き立てる。牛魔王は哮り狂つて、身を悶きながら、再び變化して脱れようとしたが、李天王の照妖鏡に照されて、最早姿を變へることが出來ず、終に天王の前に膝を折つて、降參する。

『命さへ助けて下されば、佛門に歸依します。』

哪吒は白牛に向つて言つた。

『命が惜しくば、早く扇を出せ！』

『扇は妻に預けてあります。』

哪吒は之を聞くと、直に縛妖索を出して牛王の鼻孔へ穿し、索を牽て芭蕉洞へ下りました。羅刹女は此の有様を見ると、慌て〻芭蕉扇を持つて洞の口へ出て降參したので、行者は扇を受取るや否や、天王、太子以下多くの神兵と共に、雲に駕つて火焰山へ囘り、三藏に向つて一伍一什の話をすると、三藏は沙僧と共に地上に跪いて、諸神を拜み、其の勞を謝しました。托塔天王は三藏に向つて、昨日如來から玉帝へ使があつて、三藏が火焰山で難儀をして居ること、孫悟空が牛魔王を降さうとして困しんで居ることを知らせて來たので、玉帝の命を受けて牛魔王を退治に來

三藏渉僧
神兵鋒

たことを告げ、白牛の索を牽いて、諸神と共に天上へ回つて行く。行者は芭蕉扇を持つて火焔山に上り、力任せに一度搧ぐと、颯々として風を起し、二度搧ぐと、俄かに黒雲が湧き起つて、見る間に雨が降つて來ました。此の時土地神は、羅刹女を引据ゑて、行者の側に居たが、行者は羅刹女に向つて尋ねる。

『聞く所によると、此の山の火は一旦搧ぎ消しても、一年經つと又原の通りの火焔山になるといふことだが、如何したら此の火を根絶やしにして、此の地の人民を救つてやることが出來るのか？』

『此の火を根絶やしにするには、續けて四十九扇搧げばよろしいのです。』と羅刹女が答へる。

行者は直に扇を取直して四十九度搧ぐと、忽ち火焔山の上に大雨を降らせて、あの恐ろしい火焔を絶やしてしまひました。

其處で行者は約束の通り芭蕉扇を羅刹女の手に返した後、三藏を馬に乘せ、土地神に別れて、安々と八百里の火焔山を越えました。羅刹女は芭蕉洞へ回つて後、修行を積んで、夫の牛魔王や、養子の紅孩兒と同じやうに、佛門に歸依して果報を得たといふことです。

大天竺

第六大天竺

(一) 塔上の怪

三藏師弟は火焔山を越えて西方に進むうちに、秋も過ぎ、冬の初にかゝつて、祭賽國の王城へ入りました。師弟は城門を入つて繁華な街の中を進んで行くと、十人餘りの和尚が、家々の門口に立つて、托鉢をして居るのを見かけたが、不思議な事には、何の和尚も殘らず首枷手枷をはめられ、鎖を牽いて歩いて居ます。三藏は此の有樣を見て不審に思ひ、悟空に命じて其の理由を尋ねさせると、和尚等は三藏の前へ來て跪いて言ふには、

『私共は金光寺と申す寺の者ですが、寃の罪を蒙つて此の通りの苦しみを受けて居ります。併し其の仔細は此處では申しあげられませんから、何卒寺までおいで下さい。』

と、先へ立つて案内するので、三藏は後について行くと、程なく一つの寺へ着きました。山門の上を見ると、「勅建護國金光寺」と記した金字の額が掲げてある。三藏は先づ本堂へ進んで佛を拜した後、方丈へ入ると、爰にも六七個の小和尙が柱に縛られて居た。先刻の和尙らは三藏の前へ來て叩頭をして、

『あなた方は若しや東土大唐からおいでになつたのではありませんか？』と尋ねる。

『それを又何うして知つて居るのです！』と行者は驚いて問ひ返した。

『實は昨夜一同が揃つて不思議な夢を見たのです。それは東土大唐の聖僧が、爰へ來て、我等の寃を解き、生命を救つて呉れるといふのでしたが、今日果してあなた方にお目に掛かつたので、取敢ずお尋ねしました。』

と言つて、和尙等は斯ういふ責苦を受けて居る理由を話しました。

此の金光寺は原來國王の勅願で建てられた寺で、其の寶塔に佛舍利を納めて以來、塔上にはいつも五色の雲が棚引き、夜になると金色の光が霞のやうに立騰つて遠近を照すので、四方の諸國が爭つて貢物を獻じて來たが、丁度三年前の秋の夜半に、天から血の雨が降つて、此の寺の金塔を汚した事がある。それ以來塔上の光が消えてし

まつたので、從來貢物を獻じて來た諸國も、此の兩三年は俄に來なくなつた。大臣等は金光寺の僧が塔上の寶貝を偸んだのではないかといふ疑ひを起して、此の由を王に奏したので、王は金光寺の僧を召捕せて、拷問にかけて、寶貝の有處を尋ねるのだが、元より知らない事だから白狀のしやうもなく、三年の間寃の罪を着せられて、此の通りの苦しみをして居るのです。

和尙は斯ういふ次第を細かに話すと、一同三藏の前に平伏して、

『萬望、廣大な法力を以て、此の寃罪を解いて、私共の生命をお救ひ下さい。』

と願ひました。

三藏は此の話を聞いて和尙らの身の上を氣の毒に思ひ、共々に淚を流して、

『然ういふ闇を摑むやうな事は、貧僧にも何うもしようはない。』と言つて嘆息したが、『併し貧僧は長安を出る時に、一つの願を立てゝ、寺があつたら佛を拜し、塔があつたら塔を掃はうと誓ひました。今のお話では、あなた方の難儀も原は寶塔から起つた事ですから、兎に角貧僧に一本の箒を借して下さい。塔を掃いて行つて、若し何ぞ手掛りになるやうな物でもあつたら、國王に會つて關文を換へる折に、奏上げ

てあなた方の難儀を救つてあげませう。』

斯う言つて三藏は和尚らの勸めた茶飯を吃した後、新しい箒を持つて、行者一人を連れて塔へ上つて行きました。

此の時にはもう日が暮れかゝつて居たが、下から順に掃き淨めて、第七層まで上るともう夜更けになりました。三藏は行者を顧みて言つた。

『此の塔は幾層あるのか？』

『たしか十三層だと思ひます。』

三藏は心を勵まして又三層を掃いて上つたが、第十層まで來ると、もう疲れ果てゝしまつたので、餘儀なく行者に箒を渡して、後の三層を掃はせた。行者は瞬く中に二層を掃いて、第十三層へ上らうとすると、何か人の話聲がするので、塔の窓から拔け出して、雲に駕つて頂上の室を覗くと、中では二個の妖精が酒を飲みながら、拳を打つて居た。行者は直に中へ跳込んで、妖精を捉へ、第十層まで引下して、三藏の前で糺問すると、此の妖精は、亂石山碧波潭の萬聖龍王の小妖で、此の寶塔の寶貝を偸んだのは、萬聖龍王の所爲だといふことを、逐一に白狀しました。其の白狀

悟空夜塔上妖怪捉

によると、龍王には萬聖公主といふ最愛の公主があつて、近頃九頭駙馬といふ一個の駙馬を迎へた所が、此の駙馬は廣大な通力があつて、三年前の秋の夜に此處へ來て塔の上で血の雨を降らして、塔の中の寶貝を偸み取つて囘りました。すると萬聖公主も亦天上に昇り、靈虛殿に忍び込んで、王母が秘藏の九葉の靈芝草を偸み出して、碧波潭の底へ植て置くので、宮殿の邊は晝夜の分ちなく金色の光りを放つて居る。すると近頃孫悟空といふ者が、西天へ經を取に行く路すがら、專ら人の惡事を糺し、火焰山では旣に牛魔王を降して、火焰山の火を息したといふことを聞いたので、龍王は二個の妖精に寶塔の番をさせて、悟空が來たらば直に通知させる手筈にして置いたのだといふのです。

三藏は妖精の白狀を聞き、翌朝王城へ行つて關文を換へる折、國王に此の次第を告げ、證據として二個の妖精を差出しました。國王は此仔細を聞いて大に驚き、龍王退治の事を三藏師弟に依賴したので、行者は八戒を引連れて直に碧波潭に向ひ、龍王の眷族を殘らず殺して、佛舍利と靈芝艸の二個の寶貝を取返し、靈芝艸は沙僧を使として靈虛殿に納めさせ、佛舍利は瓶へ容れて金塔の頂上へ安置しました。

此の日から金塔の上には舊のやうに五色の雲が棚引き、夜は金光を放つて遠近を照したので、國王は三藏師弟を拜んで、恩を謝し、寺の名を伏龍寺と改め、寺の僧を殘らず赦しました。

(三) 小雷音寺

三藏師弟は伏龍寺の僧に送られて祭賽國を離れ、西に向つて行くうちに、冬も盡き、春も半を過ぎて、一つの峠へかゝつたが、此の山は一面に荊棘が茂つて、左右から道を塞いで、足を踏み入れる處もありません。三藏は進みかねて當惑して居ると、行者は忽ち雲に駕つて山の樣子を見に行きましたが、やがて囘つて來て三藏に向つて斯う言つた。

『此の山は見渡す限り此の通りの荊棘藪で、行程は千里もあらうかと思はれます。』

三藏は之を聞くと愈〻驚いて、只峠の上を眺めて居るばかりであつた。八戒は側から此の樣子を見て、笑ひながら、

『師父、御心配には及びません。私が道を開けてお通し申します。』

と言つて、印を結び、呪文を念じると、忽ち身の丈二十丈ばかりとなり、釘鈀を取つて一振り振ると、これも三十丈の長さとなりました。八戒は兩手に釘鈀を揮ひながら、荊棘を掻き除けて先へ進むので、一同其の後について百里餘りも行きましたが、日暮方に一つの石碣の前へ來ました。見ると石の上方には、「荊棘嶺」の三大字を刻み、其の下に

「荊棘蓬攀八百里、古來有路少人行」

といふ十四字を鐫付けてあるので、八戒は大に笑つて、

『よし〳〵もう二句を添へてやらう。』

といひながら、

「今八戒能開破、直透西方路盡平」

といふ十四字を釘鈀の歯で彫付け、興に乘つて釘鈀を振り振り、荊棘を開いて進んだので、流石の難路をも易々と超えて、峠の西へ下りました。

荊棘嶺を越えて暫らく進むと、又一座の高山にかゝつたが、山を過ぎて平地へ下りると、一座の寺院があつて、山門に小雷音寺と記した額が掛つて居る。三藏は之

を見ると、もう雷音寺へ着いたのかと思つて、慌てゝ馬から飛下りるのを、行者は笑ひながら引止めて、

『雷音寺へ着くにはまだ〳〵間があります。師父、お心を鎭めて小雷音寺とあるのを御覧なさい。此處には妖氣がありますから、決してお入りになつてはいけません。』

と言つたが、三藏は行者の言葉を用ひないで、

『小雷音寺と號するからは、必ず何か如來を安置してあるに相違ない。假令凶事があるとしても、寺へ來て佛を拜さずには通れない。』

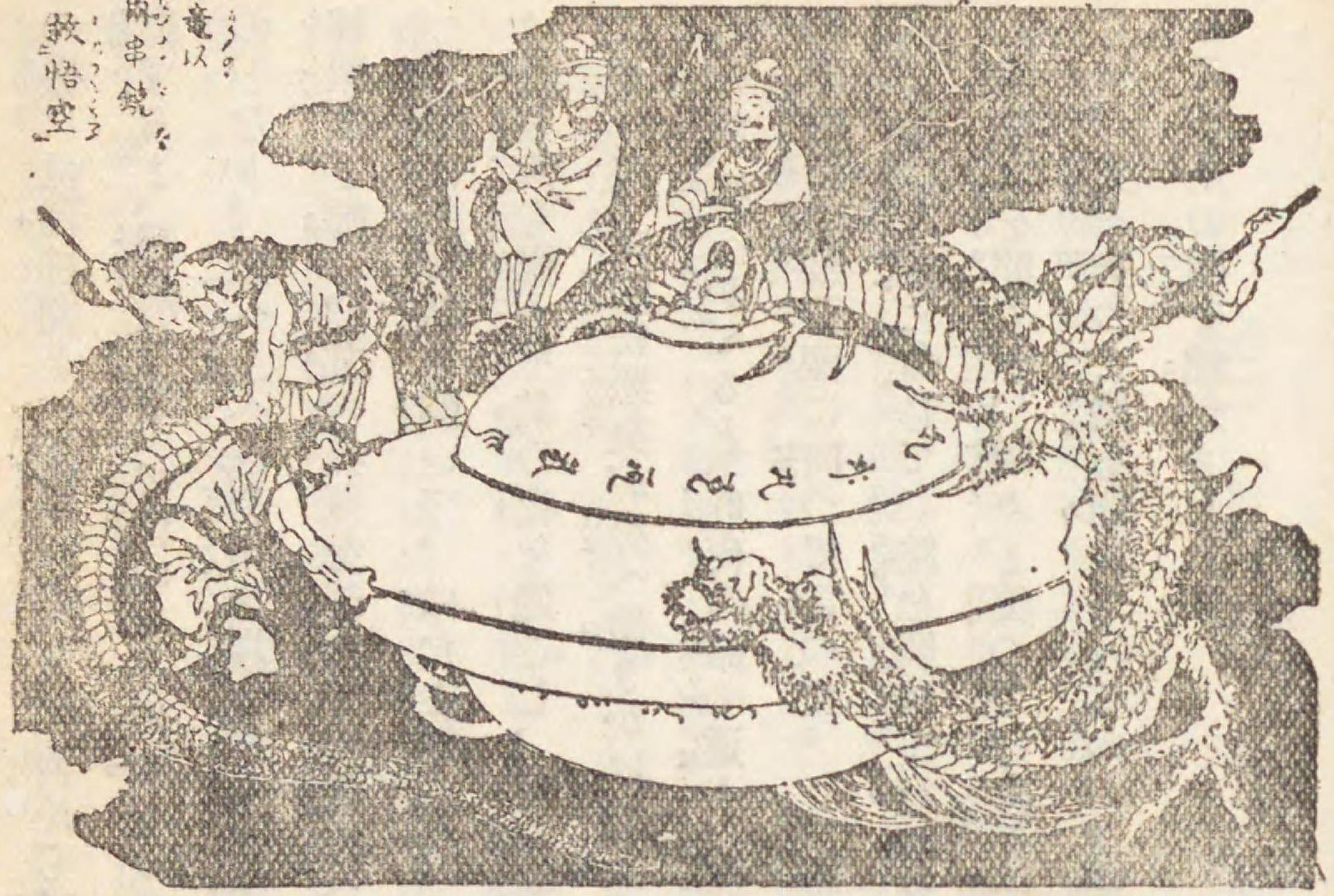
と言つて、山門を入つて行くと、中には五百羅漢、三千掲諦、四大金剛、八大菩薩、比丘尼、優婆塞などがずらりと列んで、正面の蓮臺の上には、如來が端然と坐つて居るのが見えました。

これは黄眉大王といふ妖魔が、三藏の前途を急ぐ心を見拔いて、故意と如來の姿に化け、小妖を羅漢や諸菩薩の姿に變じ、僞の雷音寺を設けて、三藏を誘ひ込んだもので、師弟が如來の前に跪いて禮拜するのを見ると、一齊に取圍んで捉へてし

まひました。此の時行者の頭上には一個の鐃鈸が落ち冠さつて、行者を中に閉籠めてしまつたが、此の鐃鈸は不思議の働きを持つて居て、上下一個に重なり合つて毛程の透間もなく、鑽で穴をあけようとしても、まるで肉かなんぞのやうに、鑽の周圍へ粘り着いて、鑽を拔く側から直に舊の通りに癒着いてしまふ。行者は色々と工夫を凝らして、やつとの事で鐃鈸の中を脱出し、師弟を救ひ出さうとしたが、此の魔王は鐃鈸の外に不思議の搭包を持つて居て、それを天へ抛り上げて、何か呪文を唱へると、人でも、馬でも殘らず其の中へ裝込んでしまふので、流石の行者も幾度となく失敗を重ねて、折角天上から賴んで來た加勢の神兵も、見す〳〵此魔王の擒にされてしまひました。最後にやう〳〵の事で彌勒菩薩の助けを借りて、此の魔王を退治することが出來て、其の性根を洗つて見ると、菩薩の身邊で磬を司る黄眉童子の化身で、行者を閉籠めた不思議の鐃鈸は、菩薩の秘藏の鐃鈸で、人々を惱ました不思議の搭包は、後天袋子といつて菩薩の寶貝の一つでした。

其處で彌勒菩薩は妖怪を搭包へ入れ、鐃鈸を持つて回つて行くと、行者は寺へ引返して配下の妖怪を殘らず打殺し、三藏師徒の縛を解いて、救ひ出し、寺へは火を

鐃鈸



金竜以角串鐃救悟空

つけて燒拂つた後、また西に向つて進みました。

小雷音寺を出てから一月ばかりして一座の高山の麓へ來て一軒の民家に宿を借りましたが、宿主の話によると、此の里は小西天といつて、此處から三十里行くと七絕山といふ嶺へかゝります。此の嶺は八百里の間柹樹ばかりで、古來柹樹には七つの長所がある。卽ち一には壽が長い、二には蔭が多い、三には鳥が巢を食はぬ、四には蟲がつかぬ、五には霜に遇つて紅葉の眺めがある、六には實が味がよい、七には落葉が大きいといふのに因んで、七絕山の名があるのです。所が此

の嶺には稀柹衕といふ路があるが、古から通つた人がないといふのは、年々柹の實が熟すると、自然に落ちて山のやうに積もるのが、雨露に打たれ、腐れ腐れて穢ないものとなり、上へ上へと全山を埋めてしまふので、今では誰も稀柹衕とは言はずに、柹屎衕と呼び、其の臭氣を恐れて、近くへも寄り付かないといふのです。

三藏は此の話を聞いて、はたと當惑し、默つて思案に暮て居る様子を見て、行者は兎も角も慰めて其の夜を過ごし、翌朝七絶山に向つて出發しました。嶺へ近づくにつれて、次第に惡臭が鼻へ衝きかけて來てたまらないので、一同鼻を抑へて行きましたが、嶺へかゝると、昨夜の話の通り、路筋も埋まつて足を入れる所がありません。此の時行者は三藏に向つて言つた。

『これは八戒に命じて、路を開けて行かせるより外はありません。』

八戒は之を聞くと、呵々と笑つて、身を一搖り搖ると、忽ち身長百丈餘りの大猪となり、先へ立つて路を開けて行くので、三藏を始め、行者、和尙も後について、易々八百里の嶺を越えました。

(三) 七人の女

三藏師徒は七絶山を越えてから、路を急いで行くうちに、朱紫國の都城へ着き、王宮へ入つて關文を換へ、此處でも國王の難儀を救つて、又西へ進み、其の年も過ぎて、再び長閑な春景色に値ひました。一日山間の村落へかゝると、道の側に一構への邸宅が見えるので、三藏は行者を顧みて

『いつもお前達に苦勞をかけるから、今日は私が行つて托鉢をして來よう。』

と言ひながら鉢を持つて出て行きました。

三藏は邸宅の前まで行つて見ると、幽靜な田舍家の中で、四個の女が、しきりに縫取をして居る。庭には一個の亭があつて、其の前で三人の女が毬を蹴て遊んで居たが、三藏が門に立つて齋を化ふ聲を聞きつけて、急に針を棄て、毬を拋り出して、笑ひながら跑出して來て、三藏を迎へて門内へ案内しました。三藏は庭を通つて行くと、亭の後には石の洞があつて、中には只石の卓があるばかりなので、三藏は少し氣味が惡くなつて、急いで外へ出ようとすると、七個の女らは寄つて集つて三藏を

押へ、縄を掛けて洞の天井へ吊して置いて、銘々に膚を脱ぎ、臍の中から絲を引出して、門に向つて投げかけ、投げかけ、見る間に門を閉いでしまひました。

行者は八戒、沙僧と路傍で待つて居たが、不圖氣がついて見ると、今迄見えて居た邸宅の門が見えなくなつて、只雪のやうに白く、銀のやうに光る幕を張つたやうになつて居るので、吃驚して二人に向ひ

『さア、しまつた、師父は妖精に遇つたに相違ない！』

と言つて、門の所へ跑けつけて見ると、それは細い絲が幾百層となく重なり合つて、まるで織つたやうな有様になり、手で押して見ると、粘り氣があつて、軟かにしつとりと手へ吸ひつく鹽梅が、何とも言ひやうのない不思議な物なので、行者は急に呪文を唱へて、土地神を呼出し、

『此處は何といふ處で、又此の物は全體何か？』と尋ねる。

『あの向ふの山は盤絲嶺といひ、山の麓に盤絲洞といふ洞があつて、七個の女怪が棲んで居ります。』と、土地は畏まつて答へた。『其の白糸は其の女怪が投げかけたものです。』

『其の妖精にはどんな通力があるのか？』と行者は又尋ねる。

『小神はまだ此の妖精の手段を見たことはありませんが、只此處から南へ三里行つた處に濯垢泉といふ一つの温泉がありまして、原は此の山上に住む七個の仙女の所有でしたが、妖精が此處へ來てからは、此の濯垢泉を奪つて自分の所有にしてしまひました。仙女が爭ひもせずに、濯垢泉を此の妖精に讓つた所を見ると、餘程の能力があるものと思はれます。それからは日に三度宛、濯垢泉へ出掛けて沐浴するのが例です。今日ももう午後になりますから、程なく出てまゐりませう。』と、土地が言つた。

行者は之を聞くと直に土地を歸して、身を變じて蒼蠅となり、路傍の草の上へ住まつて待つて居ると、少時して門の裡から、まるで蠶が桑の葉を食ふやうな音が聞えて來たと思ふ間に、白糸の幕はふつと消えて、又元の邸宅が現れ、柴の扉がぎいと開くと思ふと、中から七個の女子が走り出して來ました。行者は翅を擴げて、いきなり一番前の女子の髪に住まると、女共は、

『早く一風呂浴びて來て、あの和尚を蒸して吃はう。』

と話し合ひながら、南を指して走つて行きました。其のうちに、とある門の前へ來ると、女共は扉を推開けて中へ入りましたが、中には五丈に十丈もあらうかと思はれる池があつて、珠のやうに透徹つた湯を湛へ、深さは四尺位しかありません。池の側には一個の亭があつて、其の中に二個の衣架がある。行者は衣架の上へ飛移つて樣子を伺つて居ると、女共は亭へ入つて來て、一齊に衣服を脫いで衣架にかけ、池の中へ跳込んで、泳ぎ廻つて遊んで居ます。行者は衣架の上で考へるには、「今此の女らを打殺すのは譯もないことだが、諺にも「男は女と鬪はない」といふ通り、用意もない女を打殺すのは、男の名折れだ。まア、打殺さなくとも、此處を動かさないやうにしてやらう」と、突嗟に思案を定めて、一羽の鷹に身を變じ、衣架の上の七個の衣服を引摑むや否や、翼を張つて、山の方へ飛んで行きました。

行者は七個の女怪の衣服を剝ぎ取つて置いて、元の路傍へ回つて來て、八戒、沙僧に此の話をすると、八戒は之を聞いて笑ひながら、

『師兄、妖精と知りながら打殺さないといふのは、葉を刈つて、根を殘して置くやうなものだ。それでは老猪が行つて打殺して來るから、暫く待つて居て下さい。』

と言つて、釘鈀を擔いで跑出して行きました。八戒は直に門の前へ着いて、扉を開いて中へ入ると、七個の女子は、衣服を鷹に攫はれて、池を出ることが出來ずに、湯の中に蹲くまつて、しきりに鷹を罵つて居る所でした。八戒は女を見ると、にや〳〵と笑つて、

『そんなに怒らないで、私も一つ仲間に入れて下さい。』

と言ひながら、釘鈀を抛り出し、直綴を脫ぎ棄てゝ池の中へ跳込むので、女共は愈々腹を立つて、一齊に打ちかゝつて來るのを、八戒は逃げながら身を變じて一尾の鯰魚となり、あちらこちらへ逃げ廻つて、散々に女共を困らした後、池の中から跳り上つて、本相を現はし、直綴を着てしまふと、急に釘鈀を振上げて、打掛かつたので、女怪らは驚いて、

『お前は何者だ?、全體何でそんな眞似をするのです?』と問ひ掛ける。

八戒は尙も追廻しながら、

『乃公は東土から來て西天へ經を取りに行く長老の徒弟で、猪八戒といふ者だ。師父を捉へて蒸して吃はうなぞとは大膽な女共だ。さア此の釘鈀を受けて見ろ!』

と言つて釘鈀を揮廻して突きかゝるので、女怪らは慌てゝ、羞かしいのも忘れて、裸體で陸へ跳上り、亭の中へ跑込むや否や、臍から絲を繰出して、投げかけ、投げかけ、見る間に八戒を包んでしまひました。八戒はまるで網の中へ跳込んだ魚のやうに、頭をあげれば上へつかへ、横へ脱けようとすれば、忽ち絲に脚を取られて地へ轉ぶので、終には動くことも出來ず、眼が眩んで、地へ倒れたまゝ呻吟つて居ました。

七個の女怪は八戒を絲の下へ包んでしまふと、急に門を跳出して洞へ回り、南の方を振返つて何か呪文を唱へながら、絲を臍へ收めてしまふと、羞かしさうに三藏の前を跑け抜けて、奥へ入つて行きましたが、少時すると銘々に舊い衣服を着て、直に後門へ廻つて、大聲に、

『孫兒們、早く出て來い！』

と呼び立てました。此の聲を聞くと、何處からか七個の小兒が跳出して來て、

『母上、何か御用ですか？』といひます。

此の小兒は蜜蜂や蠡や蜻蛉などの七種の羽蟲の精で、何れも此の女怪の網に掛かつ

て、擒になり、既に殺される生命を助けられて、子分になつたのです。

女怪らは是等の羽蟲に向つて、

『孫兒們、お前達に頼むことがあります。』と言つたが、『實は今朝うつかり唐僧を促へて、其の徒弟のために飛んだ恥をかき、もう少しで生命までも失ふ所でした。今にも徒弟們が此處へ來るだらうから、お前達は門前へ出て防いで居てお呉れ、私等はこれから伯父さんの所へ行つて、相談して來るから、若し敵を逐退けたら、直に後から來るやうにおし。』

と言つて、揃つて後門から出て行きました。

さて八戒は、少時地に倒れて、呻吟つて居るうちに、何時の間にか、身邊の網がなくなつて居るのに氣がつき、急に跳ね起きて元の路傍へ回つて來て、一伍一什を話すと、沙僧は驚いて、

『師兄、それは大變だ。妖精は洞へ回つて、師父に害を加へるに相違ないから、早く行つて救はなくてはならない。』

と言つて、行者と一緒に跑け出すので、八戒も釘鈀を提げて後へ續きました。三人

は間もなく邸宅の前へ來ると、七個の、三尺にも足りない小人が、門を守つて居るので、行者は笑つて、

『お前們は何だ？』と尋ねる。

『私等は七個の仙女の兒だが、母樣の仇を討たうと思つて待つて居たのだ。』と言ふより早く、小人らは一團になつて三人に打ちかゝるので、八戒は釘鈀を揮廻して向つて行くと、小人らは急に正體を現はして、空中へ飛上り、何か口の裡で唱へると見る間に、數限りない羽蟲となり、天地に滿ち擴がつて、三人の身邊へ襲ひかゝつて來ました。八戒は之を見て慌て惑つて、

『哥々、西方の路では、蟲でも中々油斷はならないな！』といふ。

行者は笑つて、

『なに、大丈夫、こんなものは何でもない。』

と言ひながら、一把の毛を拔いて、嚼碎いてぷつと噴出すと、忽ち無數の鳥と變じて、見る間に羽蟲を喰ひ盡してしまひました。其處で三人は洞裡へ進んで、三藏を扶け下し、繩を解いて、

『妖精は何處へ行きました？』

と尋ねると、三藏は、

『赤條々て奥へ跑込んだぎり出て來ないやうだ。』

と言ふので、三人は洞の奥へ入つて搜して見たが、影も形も見えないので、元の處へ回つて、三藏を馬へ扶け上せ、洞を燒拂つて、此地を立去りました。

(四) 蜈蚣と蜘蛛

三藏師弟は盤絲洞を出てから、大道について半時ばかり進むと、前面に立派な寺院が見えるので、道から少しばかり入つて、門の前へ來て見ると、門上の匾額には黃花觀の三字が記してあります。八戒は之を見上げながら、

『黃花觀といふからは道士の住居に相違ありません。立寄つて主人に會つて行かうではありませんか。』

といふので、三藏も有理と首肯いて、門を入つて行くと、本堂は扉を閉してあるが、東の廊下に一個の道士が坐つて、藥を丸めて居る。三藏が聲を掛けて、案内を賴む

と、道士は慌てゝ丸藥を抛り出して、一同を出迎へ、本堂を開けて裡面へ案内しました。

さて三藏は本堂へ入つて、先づ正面の聖像に向ひ、香を焚いて禮拜し、定めの坐に着き、道士と禮を交はした後、道士から尋ねらるゝまゝに、大唐から遣はされて、西天へ經を取りに往く僧だと答へました。少時して、方丈から茶を運んで來た小童が、何か道士に耳語すると、道士は三藏師弟に一禮して、何か用ありげに方丈へ入つて行きました。

道士は客の前を立つて方丈へ入つて見ると、七個の女子が慌てゝ道士の前に跪いて言つた。

『師兄、少々御相談したい事があつて、先刻から此方で待つて居りました。』道士は女達を坐に着かせて、

『然ういふことであつたか、少し手が放せない仕事にかゝつて居て失禮した。』といつたが、『其の相談といふのは何か？』と尋ねる。

『今此處で伺つて居ますと、彼處へ東土から西天へ往く和尚が見えて居るやうです

が、實はあの和尚等の事でお力を借りに上つたのです。』

と言つて、女らは今朝盤絲洞で起つた事を細かに話し出しました。

此七個の女子は盤絲洞の七妖女で、先に子供らに向つて『伯父さんの處へ相談に行つて來る。』と言つたのは、此黄花觀の道士の事でした。此道士と七妖女とは、同じ師匠に學んだ縁故があるので、始終兄妹のやうに往來して、相談相手になつて居るのでしたが、今も妹達から事情を訴へて復讐を頼まれると、道士は自分の事のやうに立腹して、

『あなた方にそのやうな無禮を加へたとあつては、棄て置かれない。宜しい、私が引請けた以上は、必ず仇を討つてあげるから、安心して待つて居なさい。』と言つて、梁の上の小箱から一包の藥を取出して、女共の手に渡し、『此藥は普通の人間ならば一厘で死んでしまふが、神仙の道を得た者でも、三厘程用ひれば殺すことの出來る劇藥です。ですから茶を換へる時に、此藥を一厘宛、十二個の紅い棗の中へ交ぜて、一人に三個の棗を茶の中へ入れて運ばせて下さい。而して私の茶の中へは間違はぬやうに黒い棗を入れて下さい。』

斯う細かに分付けて置いて、道士は又本堂へ出て來ましたが、色々の話しのうちに、童子が茶を換へて來て、銘々の前へ置く。行者は不圖茶碗の中を見ると、四人の茶には紅い棗が入つて居るが、道士の茶には黑い棗が入つて居るので、心中に不審を起して、茶椀を手に取つたまゝで、樣子を窺つて居ると、八戒を先に、三藏も沙僧も、氣がつかずに茶を飮んでしまふと、見る〳〵顏色が變つて、三個一齊にあつと叫ぶと、口から泡を噴いて、倒れてしまひました。

行者は之を見ると、さてこそ毒藥だと知つて、いきなり茶椀を道士に投げつけて、

『此畜生、何の怨みがあつて師父や師弟を毒殺したのか？』と罵る。

道士は之を聞いて、

『此畜生、求めて禍を招きながら、他人を怨む法があるか？』と罵りかへしたが、『汝は濯垢泉で洗澡をした覺えがあらう。』

『濯垢泉の事を言ひ出すからは、汝もあの七個の女怪の仲間に相違ない。さア、老孫の棒を受けて見よ』

と言ひながら、行者は鐵棒を取出して、道士を目がけて打つてかゝると、道士も急

に一口の寶劍を取つて、行者と交戰ひ、本堂の中で火花を散らして戰つた。其の間に七個の女怪は一齊に奥から出て、

『師兄、私們が此奴を捉へませう。』

と言ふや否や、銘々に膚を脫いで、臍の中から例の絲を繰出して投げかけ、投げかけ、見る間に行者の周圍を取圍んでしまつたので、行者は慌てゝ觔斗を打つて、頭の上を撞破り、空中に立つて眺めて居ると、妖精の絲は見る〳〵黃花觀を包み隱して、影も形もなくなつてしまひました。行者は思はず身を縮めて、

『や、危いこと〳〵、これでは八戒がやられた筈だ。』と言つたが『全體、これは何の妖精かな？　一つ素性を調べてやらう。』

と、急に印を結び、呪文を唱へて、土地神を喚出して、

『あの七個の女怪は、絲を吐き出して人を苦しめるが、あれは何の妖精か？』と問ひ掛ける。

土地神は答へて、

『あの妖精は此處へ來て十年になりますが、小神は三年前にやう〳〵彼等の正體を

見露はしました。あれは蜘蛛の精で、彼等の繰出す絲は蛛の絲なのです。』といふ。
行者は之を聞くと大に喜んで、土地神を回し、黄花觀の外へ下り立つて、尾の上から七十根の毛を拔いて、七十個の小行者に變じ、又如意棒を變じて、七十根の鎌とし、一個の小行者にそれを一根宛持たせ、自分も一根を使つて、外邊から網を掻破つて行くと、其の裡面から七個の蜘蛛が露れたので、一個一個引出して見ると、身軀の大きさは大きな桝位もある大蜘蛛でした。行者は直に鎌を集めて舊の鐵棒に復し、七個の蜘蛛を一度に打殺してしまひました。

其處で行者は毫毛を收め、如意棒を揮廻して、黄花觀の中へ跳込んで行くと、道士も劍を擧げて向つて來て、五十餘合も戰つたが、道士は其うちに疲れて來ると、忽ち道服を脫ぎ棄て丶、兩手を高く指上げました。すると其兩方の脇の下には二十隻の眼があつて、眼の中から金色の光が出て、行者の身を射るや否や、まるで立竦みになつたやうに、前へも出られず、後へも退れず、跳り上つて金光を突破しようとすれば、忽ち射落されて地に轉ぶので、流石の行者も手段の施しようがなかつたが、忽ち一個の計略を考へ、身を一變して穿山甲となり、地の下へ潛り込んで二十里餘り

行つてから、地の上へ頭を出して見ると、恐ろしい光も此處までは來ないので、やつと地上へ出て本相を現はしました。

行者はやう／＼のことで妖精の魔力から脱出すには脱出したが、二十里餘りも地の下を潜つて來たので、筋も骨もぐた／＼になつて、再び戰ふ氣力がありません。草の上へ腰を下して、師父の身の上を思ひながら茫然考へて居ると、山の蔭から一個の老女が出て行者の前へ來かゝつたが、行者の悲しさうな顔を見て、

『長老には何でそんなに悲しさうにしていらつしやるのです？』

と尋ねるので、行者は黄花觀の一條を話した後、老女に向つて、

『何とかして師父と師弟を救ひ出したいと思つて居るのだが、あの妖精の素性が知れないので當惑して居るのです。』

と答へると、老女はひとり首肯いて、語り出した。

『私はあの道士の素性を少しばかり知つて居るが、あれは本名を百眼魔君といひ、又多目怪ともいつて、あの金光に射竦められては誰とて近寄る譯には行かないのだ。たゞ爰に一個の聖者がある。あの魔力を破つて彼奴を降伏させようと思ふには、此

聖者を頼んで來る外はない。』

行者は老女の前に跪いて、其聖者の名を尋ねると、老女は答へて、

『その聖者といふのは紫雲山千花洞に居られる毘藍婆菩薩だ、此の妖怪を降さうと思つたら、早く菩薩を請じて來るがよい。』

『其の紫雲山といふのは、何處にあるのです？』

『此處から南を指して千里ばかり行つた處にある。』斯う言つて老女は手で指して見せたと思ふうちに、忽ち五色の雲に駕つて空へ上つてしまひました。行者は驚いて老女の後を見送ると、今迄たゞの老女と思つたのは、黎山の老姆でした。行者が趕上つてお禮を言ふのを聞いて、老姆は、

『直に行つて菩薩を頼め。急いで行け！』と言ひ棄てゝ別れて行きました。

行者は觔斗雲に駕つて瞬くうちに紫雲山の上へ着き、雲から下りて千花洞の中へ入つて行くと、一個の老女が榻の上に坐つて居たが、行者が近づいて、禮拜して、

『毘藍婆菩薩、お訊ねしたい事があつて參りました。』

といふと、菩薩は榻を下りて禮を返した。

『大聖には何用あつて參られたか？』

行者は黄花觀の道士の事を話して、

『菩薩、何卒力を借して、此の妖怪を降して、師父の難を救つていたゞき度い。』

と頼むと、菩薩は快く承諾して、直に雲に駕つて、行者と共に北に向ひました。其の途々行者は菩薩に向つて尋ねるには、

『菩薩には何ういふ兵器をお持ちになりましたか？』

『一本の綉花針を持つて來たよ。あれを破るにはこれで充分だ。』

『それはどういふ針なのです？』

『これかい？　これは倅が煉成げたもので、普通の金や鐵の針とは違ふのだ。』

『あなたの令郎といふのは誰人です？』

『倅かい？　倅は昴日星官だよ。』

と話すうちにもう黄花觀の近くへ來て、金色の光が十里四方を霞めて居るのが見え出すと、毘藍婆菩薩は衣領の裡から一本の綉花針を取出し、空へ拋り上げて・一聲高く叫ぶと見る間に、金光はふつと消えてなくなつてしまひました。行者は喜んで、

『不思議、不思議、早く行つて針を搜しませう。』といふ。

菩薩は笑ひながら、掌を行者の前へ展げて、

『此處にあるよ。』

と言ふので、行者は覗いて見ると、綉花針はもうちやんと掌の上に回つて居ました。

毘藍婆菩薩は行者を從へて徐かに雲を下り、黄花觀の中へ入つて行きましたが、見ると道士は眼を閉いで本堂の入口へ立竦みになつて居るので、行者は急いで本堂へ行つて見ると、三藏、八戒、沙僧の三人は、口から泡を吐いて、死んだやうになつて居ます。行者は之を見ると、もう死んだものと思ひ込んで、涙を流して悲しむのを見て、菩薩は行者に向ひ、

『大聖、爰に解毒丹があるから、これを飲ませて御覧なさい。』

と言ひながら、袂から紙包を出して、三粒の紅い丸藥を行者の手へ渡しました。行者は急いで三人の口を開けて、丸藥を一粒宛流し込んでやると、須臾して三人一齊に毒を吐いて、息を吹返しました。其處で行者は三藏に始終の事を一遍話すと、八戒は側で之を聞いて、行者に向ひ、

『師兄、あの道士は何處に居ます！』と尋ねる。

『本堂の外で立竦みになつて居る。』と行者が答へるのを聞いて、八戒はもう釘鈀を取つて立ちかゝるのを、菩薩は引止めながら、斯う言つた。

『天蓬、あれは私が連れて行つて、門番にするのだから、まア〳〵堪忍してやつて下さい。』

行者は之を聞いて、菩薩の前へ進み、

『お言葉に背く譯ではありませんが、彼奴の正體を見屆けたいのです。』

といふと、菩薩は笑つて、

『何の譯のないことだ。』

と言ふや否や、手をあげて道士を指さすと見る間に、正體を現はしたのを見ると、丈七尺にも餘る大蜈蚣でした。

此時菩薩は三藏師弟に別れを告げ、蜈蚣を從へて紫雲山を指して回つて行くと、一同は菩薩の後姿を見送りながら、地に平伏して禮拜しました。行者は先刻菩薩から聞いた話を思ひ出して、

『菩薩は昂日星官を倅、倅と言つて居たが、昂日星官は、前日琵琶洞の女怪を降した時に見た通り大公鷄だから、其の母なら母鷄に相違ない。して見れば蜈蚣を退治する位何でもない筈だ。』

といふと、一同も熟々感服して、行者の骨折を感謝し、方丈へ入つて齋飯を調へて腹を充たした後、黃花觀を燒拂つて、再び西に向ひました。

(五) 五色の鳥籠

三藏師弟は黃花觀を出て、大道について進むうちに、春も去り、夏も過ぎて、秋の初めになり、獅駝嶺といふ峠へかゝると、山中に獅駝洞といふ洞があつて、此處に三人の魔王が四萬七八千の小妖を指揮して立籠り、遠近の民を惱まして居る。第一の魔王は變化自在で、一たび口を開けば城門の如く、十萬の天兵をも呑み下ろす勢がある。第二の魔王は身長三丈に餘り、龍のやうな鼻があつて、一たび此の鼻で捲く時は、鐵の身體を持つた者でも、忽ち締め殺す力がある。第三の魔王は雲程萬里鵬と號して、一飛に九萬里を飛行く通力を持つてゐる上に、陰陽二

氣瓶と呼ぶ寶貝があつて、人を裝入れ、一度裝込まれたら一時三刻のうちに溶けて水になつてしまふ。此の第三の魔王は、五百年前に此の山の西四百里の地にある獅駝國へ來て、此の國の君臣百姓を一人殘らず吃ひ盡して、全國を奪ひ取つてしまつた程の猛惡な妖魔だが、三藏が近く此の嶺を通ることを知り、其の肉を吃つて不老長生を得ようといふので、此の獅駝洞へ來て、兩個の魔王と兄弟の約を結び、唐僧の一行を待構へてゐるのでした。

行者は此消息を探り知つて、姿を變へて獅駝洞へ忍び入り、秘術を盡して、魔王らを悩ましたが、最後に獅駝國の都へ來て、師弟四人は敵の計略にかゝつて擒になり、鐵籠の中で蒸殺されるばかりになりました。行者は此處でも樣々の通力を顯はしたが、終に靈山へ行つて如來の助力を頼むと、如來は、文殊菩薩と普賢菩薩を從へて、獅駝國へ來て、三個の魔王を降して、正體を露はしたのを見ると、第一の魔王は文殊菩薩の青獅、第二の魔王は普賢菩薩の白象、又第三の魔王は天地開闢の時に天地と共に生れ出た大鵬で、孔雀明王菩薩と同腹の靈鳥でした。

獅駝國の難を脫れて西へ進むと、二三ケ月を經て又一つの都へ入りました。此の時

比丘國

はもう冬の初めでしたが、三藏は馬に上つて、城下を進んで行くと、兩側の家々の門に、五色の絹で包んだ鳥籠が伏せてあります。三藏は馬の上から之を見て不審に思ひ、行者に命けて籠の中を覗かせると、どの籠にもきまつて男の兒が一個宛入れてあるので、愈不審が晴れず、宿舍へ着くと直に、此事を尋ねると、宿主は急に聲を低くして、

『あの鳥籠の事を申上げるのは、此の國の恥辱をお話するやうなもので、誠に面目ない次第です。』と前置して、其の理由を語り出しました。

其話によると、此國は、原は比丘國と言つたが、今では此名を呼ぶ者がなく、小子城と呼ぶやうになつた。それには理由のある事で、三年前に一個の道士が一個の美しい女子を連れて來て、國王に獻じましたが、國王はすつかり此の美人の色に溺れて、道士を國丈と敬ひ、其の女子を美后と呼ばせて、晝も夜も側を離さずに寵愛した結果、近頃になつては日増に痩せ衰へて、飲食も進まず、醫者の藥も利かないやうになつた。其處で國丈は神仙の藥を尋ねるといつて、東海の島々へ行き、不老長生の靈藥を取つて來て、其の藥引には千百十一人の小兒の肝を用ひなければなら

ぬといふので、國中へ令を下して、一軒について一人の小兒を獻じさせることになりました。あの籠の裡の小兒は藥引として王に獻じるためのもので、小兒の親達は國法が恐いので、表面には平氣な顔をして居るが、裏面では人知れず嘆き合つて、さてこそ誰れ言ふとなく此の國を小子城と言ひ囃すやうになつたのです。

三藏は此の話を聞いて、同情の涙を流し、國王の無道を憤るのを、行者は側から慰めて、何とか手段を設けて、此小兒們の命を助けようと請合ひました。其夜行者は空中の諸神を呼集めて、城中の小兒們を、籠のまゝ山林の中へ運んで匿させて置いて、翌朝は三藏に從いて王城へ出向きました。さて師弟は王の面前へ出て關文を換へる序に、側に立つた國丈の様子を見ると、確かに妖精に相違ないので、行者は一個の計略を設けて、其正體を現はさせて見ると、國丈は南極壽星の白鹿で、美后は一個の白狐でした。國王は之を見て始めて迷ひの夢が醒め、深く羞ぢ入つて、其身の不德を悔んだので、行者は諸神に命じて、小兒們を再び城中に運び込ませ、親達を呼んで無事に小兒們を返してやり、國王を始め城民らの感謝を受けて、比丘國を立出でました。

（六）滅法國

師弟四人は比丘國を離れてから、暫くは何事もなく、山を越え、林を過ぎて行くうちに又々夏の始めとなり、滅法國の都へ着きました。此の國の王は大變な佛法嫌ひで、二年前から一萬人の和尚を殺さうといふ誓ひを立て、今日までに九千九百九十六人の僧を殺し、後四人を殺して早く一萬人の數を滿たしたいと言つて居る所でした。三藏は城の外で此風説を聞いて、顏色を變へて心配するのを、行者は宥めて先づ師弟三人を城外へ忍ばせて置き、ひとり城內へ入つて行きましたが、少時して四人前の衣服と頭巾を持つて歸つて來て、一同俗人の姿になつて城內へ入りました。

さて四人は三藏の白馬を牽きながら、一軒の旅宿へ行き、馬商人だと言つて泊り込んだが、食事を終つて寢る段になると、三藏は若し熟睡して頭巾でも落したら大事だと言つて心配するので、行者は主人を呼んで、

『我等四人が四人共暗い處でなければ睡れない癖があるのだが、何處か暗い室はな

いか？』と尋ねる。

『暗い室と仰有つても、私の家には、丁度よい室がありませんが。』と言つて主人は少時考へて居たが、『たゞ此の下の室に大櫃があります、あの中なら六七人は大丈夫寢られますが、それでは如何なものでせう？』

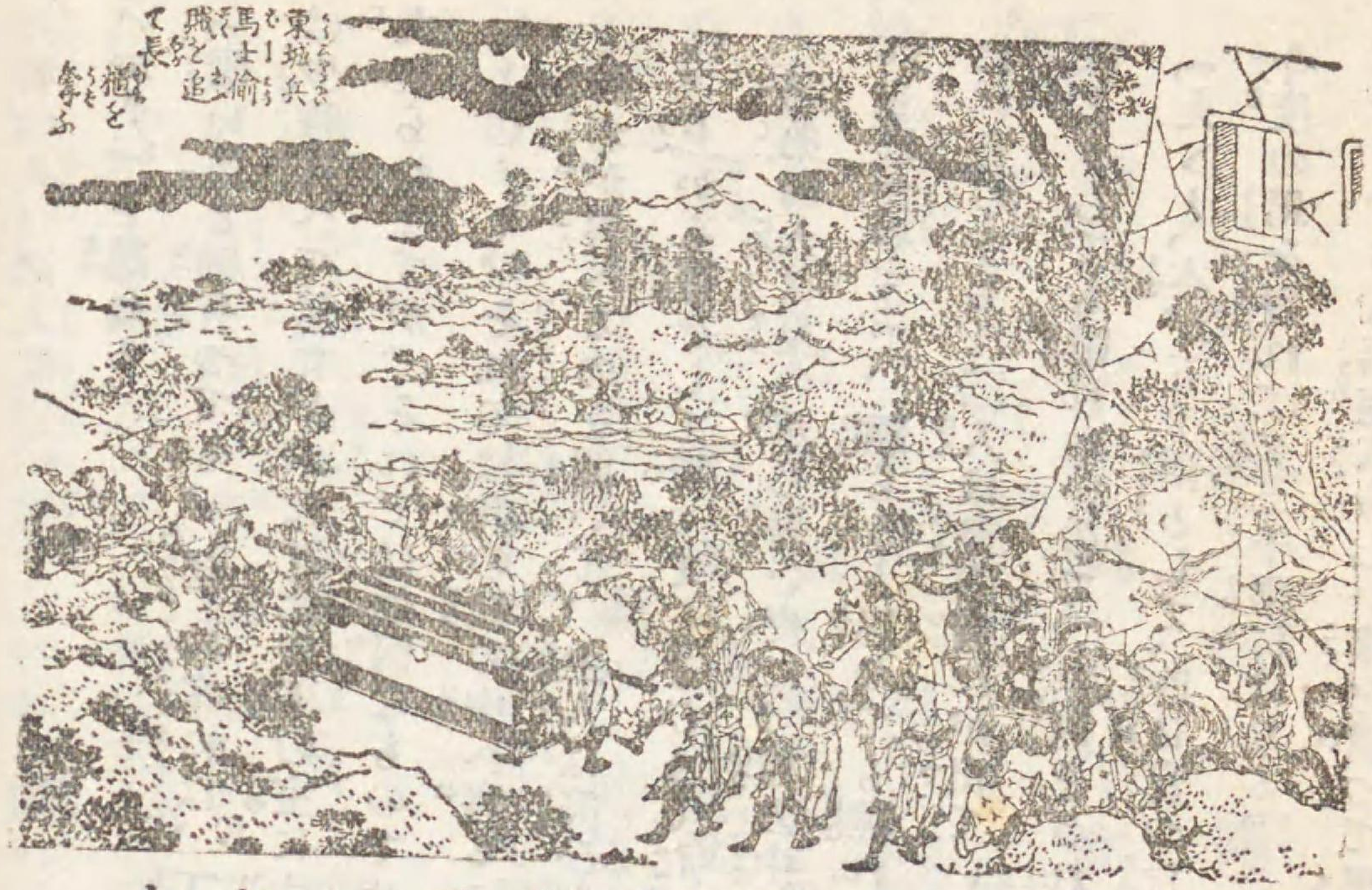
『よし〳〵、それでは其の櫃の中へ寢ることにしよう。』

と行者が答へるのを聞いて、主人は笑ひながら四人を階下へ案內して、櫃の中へ入れ、上から蓋をして行つてしまひました。

師弟四人は夏の蒸し暑い夜に、櫃の中へ閉籠められたので、まるで蒸籠へでも入れられたやうで、睡らうと思つても睡れないで、夜半過ぎまで轉げ廻つて居りました。そのうちに三人は晝の疲れが出ていつともなく睡つてしまつたが、只行者だけはどうしても睡れないので、退屈まぎれに、わざと虛事を並べ立てゝ、

『えゝと、本が五千兩として、昨日賣つた馬が三千兩で、今兩掛の中に四千兩あるし、今度の馬を賣れば又三千兩にはなる、これなら大分の利得になるわい！』

なぞと、さも馬商人らしい事を言つて居ると、丁度此の隣の室に二三人の盜賊が泊



り合せて居て、不圖行者の獨語を聞きつけ、『これは旨い仕事が見つかつた』と思つたので、窃と抜出して、二十人ばかりの仲間を連れて押込んで來て、いきなり大櫃を擔ぎ出しました。盗賊らは大櫃を擔いで城門を出ようとすると、忽ち番兵に見つけられて、暫くは抵抗して戰つて居たが、其の中に多勢の兵が物音を聞きつけて跑着けたので、盗賊らは敵はないと見て、大櫃を抛り出して逃げて行きました。兵士らは盗賊らが置いて行つた櫃を舁き上げて、營所へ運び入れ、『夜が明けたら國王に奏聞げよう。』と話し合つて引込んでしまひました。

此の時三藏を始め八戒、沙僧も、櫃の中

で眼を覺まして、委細の様子を聞いて居たので、『明日此の櫃を國王の前へ持出されたら、もう運の盡きだ。』と思つて、互に太息を吐いて居ると、行者は三藏に向つて、『師父、決して御心配には及びません、弟子に考へがありますから。』と言ひながら、蟻になつて櫃から抜出して行きました。

行者は櫃を出ると、直に原身にかへつて、雲に駕つて王宮へ行き、左の臂の毛を殘らず抜いて、息を吹きかけると、幾千とも知れぬ瞌睡虫になつたので、土地神を呼び出して、此の無數の瞌睡虫を、王宮を始め文武百官の宅へ落なく振蒔かせ、次に右の臂の毛を殘らず抜いて、幾千とも知れぬ小行者に變じ、又鐵棒を變じて、幾千とも知れぬ剃刀とし、一個の小行者に一丁宛持たせて、王宮を始め文武百官の宅へ放して、一人殘らず頭髪を剃落させてしまひました。これが濟むと、行者は身を一搖り搖つて毫毛を元へ戻し、剃刀をも集めて元の鐵棒とし、耳の内へ收つて、櫃の中へ立囘り、三人に此の由を話して夜の明けるのを待つて居りました。

さて翌朝になると、國王を始め、皇后も妃も官女も、宮中の者が、一夜の中に一人殘らず坊主頭になつて居ることが知れたので、宮中では互に頭を抱へて大騷ぎをし

て居ると、文武の百官が揃つて表を上つて、一夜の中に殘らず和尙になつたことを啓奏げたので、國王は淚を流して百官に向ひ、

『斯う一夜の中に宮中のものが殘らず頭髮を失ふといふのは、朕が和尙を殺した報ひに相違ない。今日限り和尙を殺すことを停止するから、此の旨を國中へ觸れ知らすがよい。』と命じた。

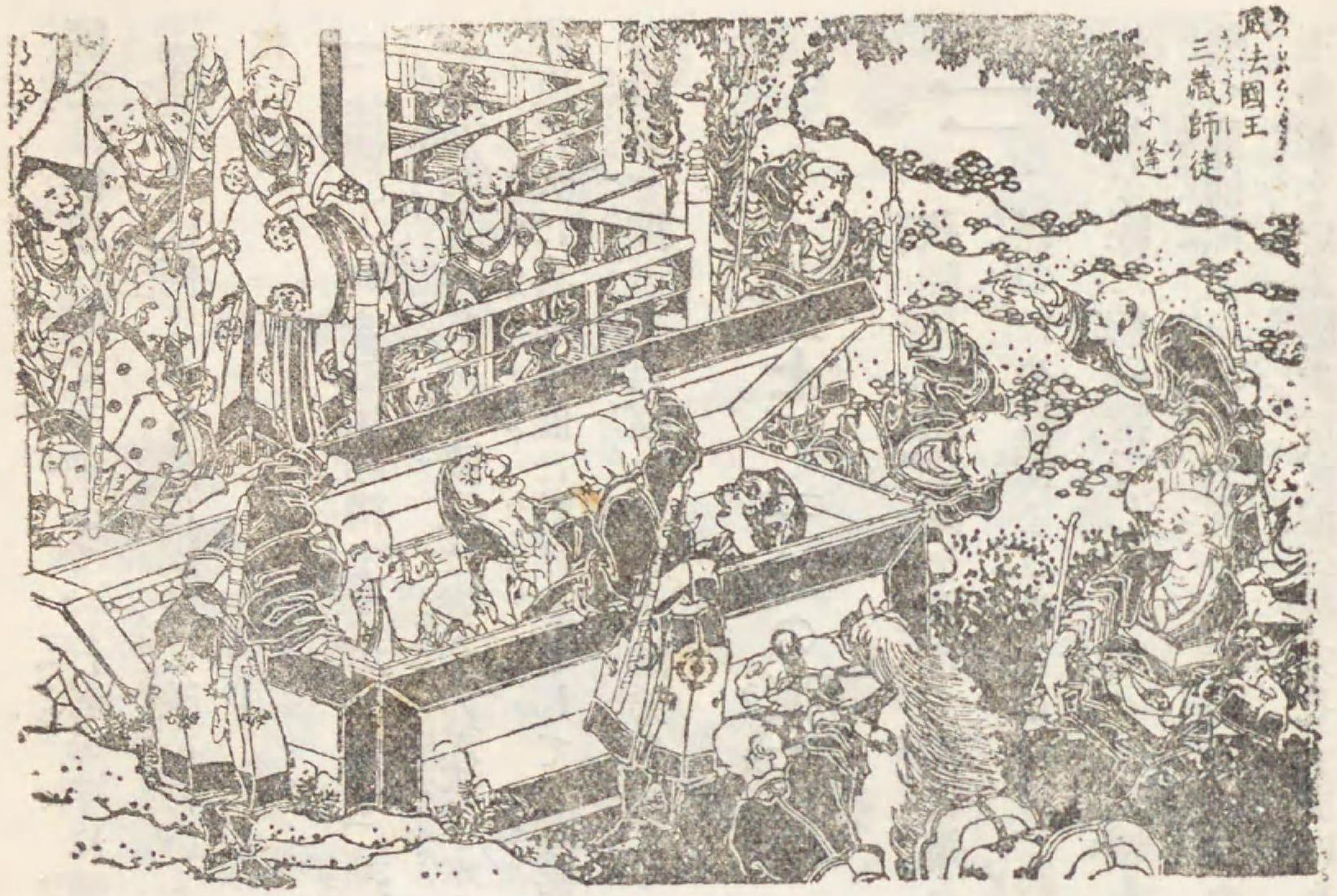
其處へ總兵官が多くの兵士に一個の大櫃を擔はせて來て、王の前へ跪いて、昨夜の盜賊の次第を奏上げました。國王は左右に命けて櫃の蓋を開かせると、中から四個の和尙が現はれたので、群臣百官は驚いて眺めて居ると、國王は忙しく玉座を下り

『長老には何處から來られた？』と尋ねる。

『貧僧は東土大唐から遣はされて、西天へ往つて經を取る者です。』と三藏は答へた。

『昨夜此國へ來て陛下が一萬人の僧を殺すことを聞きましたので、俗人の姿になつて旅宿を取りましたが、素性を知られてはならぬと思つて、大櫃の中で睡つて居るうちに、盜賊に偸み出され、官兵の手へ渡つて此始末になつたのです。』

『實は以前此國の僧が朕を謗つたことがあつて、これを憎む餘りに、一萬人の和尙



を殺さうといふ誓を立て、今日までに九千九百九十六人を殺しました』と王は三藏に向つて言つた。『所が、昨夜になつて宮中の者が一夜の中に頭髮を沒して、殘らず和尙の姿になつてしまひました。これは朕等を佛門に入らせようといふ天の心と悟つて、和尙を殺すことを思ひ止まりました。今から師父の弟子となつて、敎へを聞きたいと思ふが、此の願ひを聽いて下さるまいか？』

行者は之を聞くと、王の前へ進んで、

『陛下が然ういふお心ならば、只此の關文を換へて、私們を無事に通過させていたゞき度い。』と言ふ。

國王は卽座に關文を換へて、行者の手に渡しながら言つた。

『就いては何よりも先に國號を改めたいと思ふが、何か適當な名を選んでいたゞきたい。』

『「法國」といふ名は結構ですが、たゞ「滅」の字が宜しくない。今日以後「欽法國」とお改めになつたら、國家は安全、皇統は永く傳はるでありませう。』と行者が答へた。

國王は大に喜んで直に勅命を下して、國號を欽法國と改め、三藏師弟のために盛んな餞宴を開き、百官を率ゐて師弟を城外まで見送りました。

（七）三尊の彌陀佛

三藏師弟は欽法國を離れて西に進み、隱霧山といふ高山にかゝつて、又々妖怪のために惱まされましたが、行者の働きで、妖怪を退治して見ると、それは劫を經た豹の精でした。此の山を越えるともう天竺國の領內でしたが、師弟は先づ鳳仙郡といふ所へ着いて、郡侯のため龍王に雨乞をして、三年の旱魃を救ひ、玉華州といふ處では、城の北方七十里にある豹頭山の妖怪を退治しました。すると

悟空竜王を史て雨とも

此の妖怪は風を發して東南の方へ走り、竹節山の九靈元聖といふ老魔王の洞へ逃げ込んで行きました。此の魔王は九箇の頭があつて、一度に九人を啣へて行くので、流石の行者も此の妖怪には持て餘したが、結局太乙救苦天尊の乘料の九頭の獅子だと分つて、天尊の助けを借りて降伏させ、豹頭山の妖怪を始め、老魔の配下の六個の妖將を殺して見ると、何れも獅子の精でした。

玉華州を出て五六日行くと金平府といふ城下へ入ります。師弟は城外の慈雲寺といふ寺へ立寄つて足を休め、寺僧は齋飯を勸めながら、次のやうな話をしまし

華燈會

た。

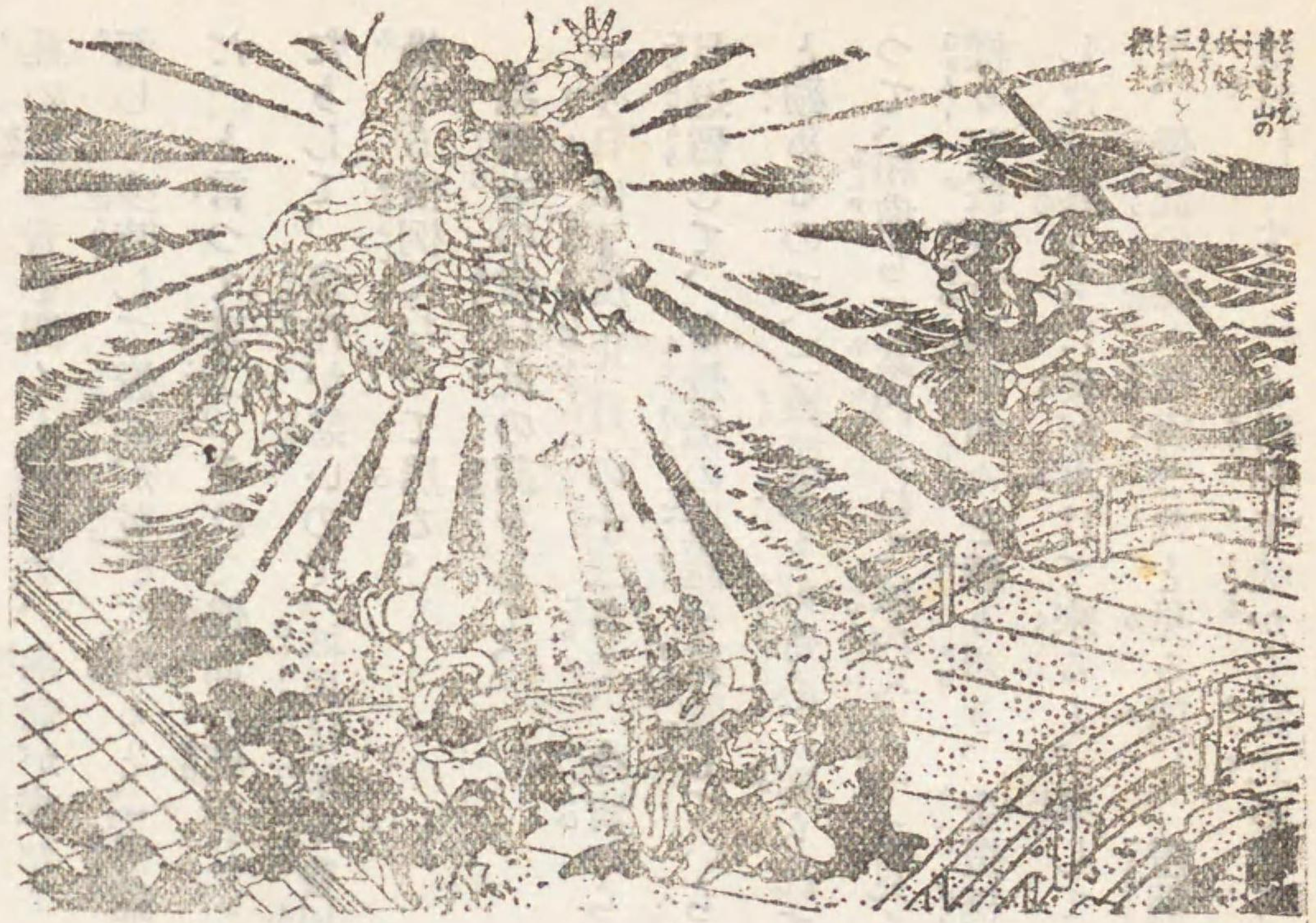
此の地では上元（正月十五日）の宵に燈火を佛に獻じる習慣があつて、正月の十三日から十八九日の頃まで、毎夜燈籠を掲げた行列が城內を練歩き、街々は其の燈籠を見物する人で、終夜雜沓する。中には十五日の元宵から三晩の間は、金燈橋といふ橋の上で三個の大燈籠を點す。燈籠の上には細い金の絲で編み、內側を硝子で張つて、二層の樓閣の形に作つたものを冠せ、燈盞には各五百斤の酥合香油を用ゐ、四十九本の大燈心を浸して火を點すので、三個の大燈籠はまるで月光のやうな和らかな光りを投げ、燈油からは何ともいへぬよい香氣を噴いて、夜の空氣に充ち擴がつて行く。此の香油は此の金平府の後の旻天縣といふ處にある二百四十軒の燈油店で調へるもので、一斤の値が銀三十二兩、三個の燈籠で三晩のうちに點す油の値は、合せて四萬八千兩、之に雜用を加へて五萬餘兩の銀子を只三夜の中に費す。昔から此の夜三尊の彌陀佛が姿を現はして、供へた燈油を收めて行くと言ふ言傳へがあつて、半夜頃に、一陣の風が起つて、燈籠のあたりを吹き拂ふと思ふ間に、燈が急に暗くなつて、油がすつかり乾いてしまふ。此の時まで雜沓して踊り狂つて居た人々は、

此の風の音を聞くと、『さア、佛爺が來た？』と言つて、我れ勝ちに逃回つて行く。而して少時して燈油が乾いて居ると、『佛爺が燈を受けて下すつたから、今年は豐年だ。』と言つて喜ぶ。それで燈油の乾かない年には、屹度荒れがあつたり、旱があつたりして、農作が惡いので、城民は年々費用を惜まず、上等の香油を選んで、燈籠を揚げる慣例になつて居る。

慈雲寺の僧は此の話をして、

『今日は丁度正月の十三日で、今宵から家々の門に燈火が揚がりますから、四五日逗留して、金燈橋の燈籠を見物していらつしやい。』

と勸めるので、三藏師弟も好奇心に驅られて足を留めましたが、愈々十五日の夜になつて、和尚らに案內されて城內へ入つて見ると、話に聞いたよりも一層の賑はひで、樣々な假裝行列が街々を練り歩き、金燈橋へ來ると、もう押返されない程の群集でした。其うちに夜が更けて來ると、果して一陣の風と共に三尊の佛が空中に現はれて、燈籠の側へ近寄つたと見る間に、燈籠の火が急に暗くなり、行者が『師父、あれは妖怪です！』と叫んで後から扯止めようとする間もなく、三藏を摑んで、何處と



もなく行つてしまひました。

行者は直に觔斗雲を飛ばして後を追つて行くと、怪物は東北の方に走つて、曉方近く一座の高山へ來ました。此の山は青龍山といひ、妖怪は此の山中の玄英洞に住む三個の魔王で、名を辟寒大王、辟暑大王、辟塵大王と呼び、何れも千年の修行を積んだ犀牛の精で、洞中には牛頭の小妖が群つて居て、流石の行者も攻めあぐんだが、終ひに太白金星の敎へに從ひ、玉帝に願つて、斗牛宮の四木星を加勢に賴み、共々に青龍山に下つて、三魔王を始め、洞中の小妖を殘らず退治し、三藏を救ひ出

して慈雲寺へ回りました。

其處で行者は怪物を退治した次第を金平府の官民に告げて、來年からは最早元宵の燈籠に無益の金銀を費つて、人民を苦しめるには及ばないと言觸らしたので、府の役人は師弟四人を招待して盛んな饗宴を開き、又旻天縣の燈油店では、活佛の力によつて、毎年數萬兩の費を省くことが出來たと喜び、二百四十軒が申合せて、毎日輪番唐僧師弟を請じて供養をしようといふことになり、一同で引留めて、どうしても放さないので、三藏は心にもなく慈雲寺に一月餘り逗留して、家々の供養を受けて居たが、終に行者と相談して、一夜密に慈雲寺を忍び出し、逃げるやうに西方へ出立しました。

（八）月宮の兎

慈雲寺を出てから半月餘り行くと、路傍に一座の大寺があつて、山門の匾額に、「布金禪寺」といふ四字が誌してあります。三藏は之を見ると少時立停まつて考へて居る様子でしたが、徒弟に向つて、

『布金寺といふからには、或は古の祇園精舍の跡かも知れない。經典に、佛が舍衞城の祇樹給孤園に在した時、給孤獨長者が祇陀太子に請ひ、黃金を地に布いて、この園を買ひ、精舍を建てゝ法を聽いたといふことがある。布金寺の名はこの故事に因んだものと想はれる、然うすれば此處は古の舍衞國の地に相違ない。』
と言つて、馬から下りて山門の方へ進むと、中から一個の禪僧が出て、師弟を方丈へ案內して齋飯を勸めました。齋飯が畢つてから、三藏は寺僧に向つて、この布金寺の由來を尋ねると、果して祇園精舍の跡で、原は給孤獨園寺と言つたのを、後に長者が黃金を地に布いた故事に因んで、布金寺と改めたので、此の寺の前面は則ち古の舍衞國の地で、此の寺の在る所が長者の祇園の跡に當り、寺の後には今も祇園精舍の基趾が遺つて居て、大雨の後なぞには折々金銀を流し出すことがあるといふ答へでした。

その夜三藏は行者を連れて寺を立出で、月を踏んで、祇園長者の昔を偲びながら、此處彼處と徘徊つて居ると、一個の老僧が出て兩人の前へ來て禮拜し、この寺の院主だと名乘つて、祇園の古蹟へ案內しました。世尊が經を說いたといふ祇園精舍の

給孤園に三藏女の泣聲を怪む

跡には、僅かばかりの空地があつて、處々に石墻の根が遺つて居る。三藏は此遺跡に立つて、往古を懷ひ、今を考へて、頻りに感慨に打たれながら、小高い所まで足を運んで行くと、不圖人の哭聲が耳に入つたので、不審に思つて老僧に尋ねると、老僧は俄に三藏師弟を拜して、
『これには深い仔細のある事で、是非二位に聞いて頂きたいのです。』と言つてその仔細を語り出した。『實は丁度昨年の今宵でしたが、弟子は月を眺めて庭を歩いて居りますと、忽ち一陣の風が袂を掠めて吹いて行つたと思ふうち

に何處ともなく人の嘆く聲が聞えましたので、聲をたよりに此の祇園の遺跡へ參りますと、一個の美しい女子が爰で哭いて居るのです。『何人の女で、どうして此處へは來たのか?』と尋ねますと、女子は答へて、『私は天竺國王の公主ですが、今宵月下の花を尋ねて花園の中を徘徊つて居ると、急に風に擄はれて爰まで連れて來られたのです。』と申します。弟子は不審な事とは思ひましたが、兎も角も近くの小屋の裡へ入れて堅く締切り、入口に食器を差入れるだけの小さな孔を穿けて置いて、僧弟們には『昨夜乃公は一個の妖邪を捉へて　彼處へ封じ込んで置いたから、一日兩度宛茶飯を與へて命を繋がして置け。』と分付けて置きました。するとその女子も賢い者と見えて、よく弟子の心を汲分けて、白日のうちは亂心の風を粧ひ、譯の分らぬ事を言つて、徒弟們の眼を瞞まして居りますが、世間が靜まると父母の言を思ひ出して哭いて居るのです。弟子はその後幾度となく宮城へ行つて、それとなく公主の樣子を探つて見ましたが、公主にも何の異狀もありませんので、女子は其のまゝに小屋へ入れてあるのですが、今以て不審が晴れないで居るのです。』

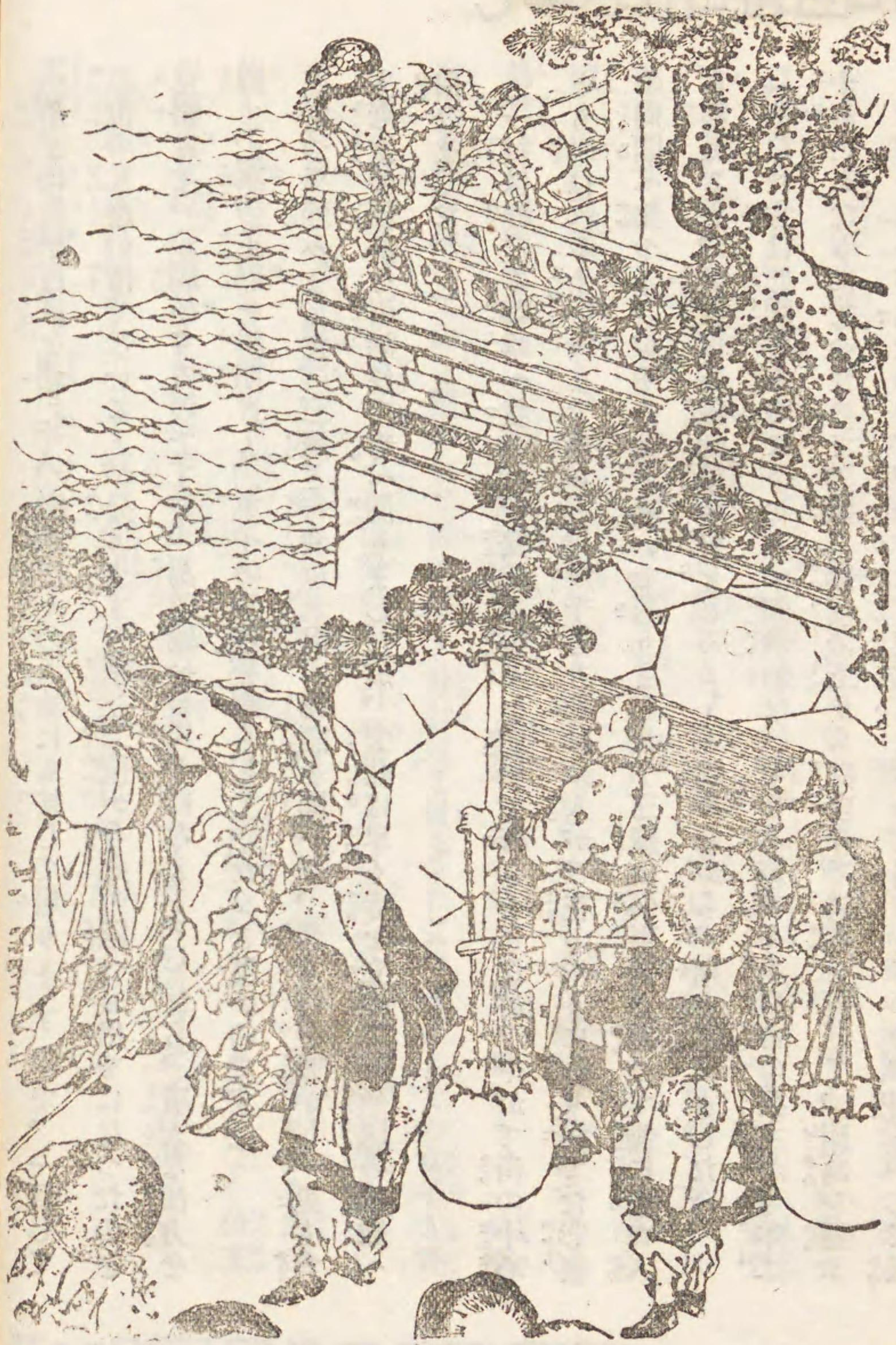
老僧は斯う言つて、更に兩人に向ひ、

『弟子は最早百歲を越えて、從來樣々の人物にも接して居りますので、一目して二位の凡庸の僧でないことが分ります。幸ひ二位が今此の國へお出でになつたのを見掛けて、お願ひするのですが、萬望城へお入りになりましたら、廣大な法力を以て、事の正邪を辨明けて、弟子の不審を晴らしていたゞき度いのです。』

と言つて頼みました。三藏と行者は老僧の物語を聞いて、深く心を動かし、兎も角も老僧の頼みを引請けて寺へ回りましたが、翌朝は早く寺を立つて天竺國の都城へ向ひました。

一行は程なく都城へ着いて、繁華な街々を通つて行きましたが、やがて街の中心とも思はれる十字街まで來ると、幾千とも知れぬ人が、花のやうに飾り立てた彩樓の周圍へ集つて、がや〳〵と騷いで居りました。三藏は何事かと思つて側に居た人に尋ねると、其人は三藏師弟の姿をじろ〳〵と眺めながら、斯う答へました。

『あなた方は此國の方でないから、御承知ないでせうが、今上皇帝の公主が今年二十歲におなりになつたので、此の彩樓の上から御自分で繡毬を抛げて、駙馬を選ぶといふお布令が出たのです。今日は丁度其日に當つて居りますので、何とかして公



主の綉毬に當つて、國王の駙馬になりたいと思ふ人々が、早朝から彩樓の下へ集まつて、此通り騒いで居るのです。』

三藏は此話を聞いて、群衆の間を分けて彩樓の下を通らうとすると、忽ち樓の上から公主の綉毬が落ちて來て、三藏の帽子に當りました。すると多くの女官が彩樓を馳下りて來て、一齊に三藏を拜して、手を執らぬばかりにして彩樓の前へ連れて行き、否應なしに、公主の輦へ乘せて宮城へ歸りました。

三藏はやがて天竺國王の前に宣し出されて、その生國とこの國へ來た次第を尋ねられたので、大唐皇帝の勅命を奉じて、大雷音寺へ經を取りに行くことを答へ、『今日何も知らずにあの彩樓の下を通りかゝり、過つて公主の綉毬には當つたが、固より出家の身で、公主の配偶になれるやうな者ではないから、萬望、關文を換へて、靈山へ行けるやうにしていたゞき度い。』と願つたが、國王はどうしても聽き入れないで、『あの綉毬に當つたのは、天の選んだ良縁だから、今更天の意に背いて變更することは出來ない、吉日を擇んで公主と婚姻の式を擧げなければならない。』と言つて、直に陰陽官に命じて婚禮の日を擇ばせました。三藏はこの難題にほと〳〵當惑

して、少時は默つて思案に暮れて居たが、急に一計を思ひついて、『三個の徒弟を呼んで、自分の代りとして大雷音寺へ遣つて、經を取らせることにしたい。』といふことを申出しました。國王は三藏の言ふがまゝに、役人を遣つて、三人の徒弟を宮中に迎へ入れて、拜謁を賜はつて居る所へ、陰陽官が御前に進んで、本月十二日が黄道吉日に當るといふことを奏上げたので、國王は左右の者に命じて、一先づ三藏師弟を御花園に案内して、厚く歡待させました。

其夜行者は三藏の耳に口を寄せて、

『いよ／＼布金寺の長老の賴みを果す時が來ました。今日國王の面を見ますと、確に妖邪の氣が見受けられますから、殊によると公主は妖精かも知れません。兎に角十二日には公主も出て參るでせうから、其の時一目見れば直に辨別がつきます。萬事は老孫が心得て居りますから、決して御心配には及びません。』

と言つて安心させて置きました。愈々婚姻の當日になると、國王は三藏を伴つて、宮中へ入つて行くのを見て、行者は直に身を變じて蜜蜂となり、三藏の帽子へ住つて樣子を覗つて居りました。此時公主は、皇后や妃嬪らに圍繞まれて、王と三藏の

二人を出迎へたが、行者は帽子の上から見て居ると、公主の頭の上に妖精の氣が露れて居るので、直に三藏の耳の側へ行つて、

『師父、此の公主は假物です。今正體を露さしてお目にかけませう。』

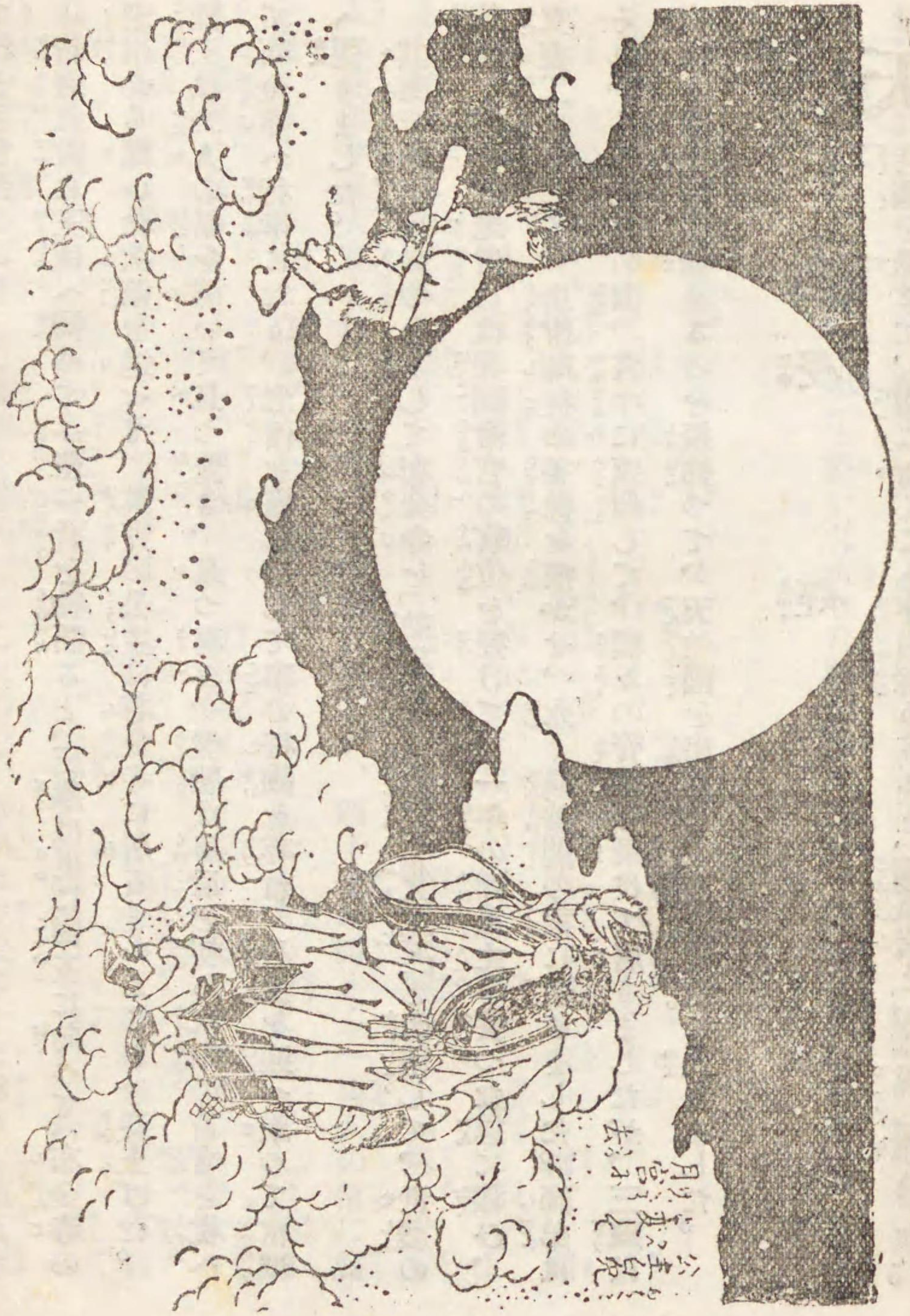
と呼くや否や忽ち本相を現して、公主の前へ立上り、其の手を捉へて、

『此の畜生、公主の姿を假りて、我が師父を騙すつもりか？』

と罵ると、公主は遽てゝ行者の手を振放し、衣服を脫ぎ、玉飾を棄てゝ、いきなり御花園へ跳下りて、土地廟へ跑込んだと思ふうちに、杵のやうな形をした一本の棍棒を持つて出て、行者の鐵棒と交戰ひ、暫くは空中で戰つたが、忽ち金色の光を放つて南の方へ逃げて行きました。

行者は妖精の後を追つて行くと、一座の高山の前へ來て、其の光は忽ち消え失せてしまひました。行者は直に山神、土地神を喚出して山中を案内させると、山上の兎の穴に藏れて居た妖精は、再び跳出して杵を揮つて立向つて來るのを、行者は鐵棒を舞はしてたゞ一擊に打殺さうと追ひ追つて行くと、妖精は忽ち空中へ跳上つて、戰ひながら後へ後へと退つて行く。此の時日はとつぷりと暮れて、天は墨色の幕に包

まれて居たが、忽ち前面に當つて、太陰星君が嫦娥を從へて立現れ、行者に向つて、聲を掛けたので、行者は棒を收めて禮をすると、太陰星君は徐かに口を開いて、
『今大聖と戰つて居る其の妖精は、原來廣寒宮で仙藥を搗いて居た玉兎ですが、今一年前に宮中を逃げ出して下界に降りました。これにはちと仔細のあることで、今より二十年前に此の玉兎は蟾宮の宮女に打たれたことがあります。此の宮女は其の折下界に降り、天竺國王の皇后の腹に宿つて公主と生れ代つたのを、此の玉兎が知つて、前年の怨みを晴らしたい一心から、昨年月宮を逃げ出して、公主を山中へ棄て、自分が公主になつて一年を過したのです。』と言つたが、『斯ういふ理由があるのですから、萬望、此の玉兎の命を饒して、私の手へ返しては下さるまいか？』
行者は之を聞いて太陰君に向ひ、
『然ういふ因緣があることなら、老孫に異議はありません。直に此妖精をお收め下さい。』と答へたので、太陰君は妖精を指しながら、
『畜生、正に歸れ？』
と一喝すると、忽ち原身を現して一個の玉兎となり、太陰君に從いて月宮へ上つ



て行きました。

行者は直に王城へ回つて一伍一什を物語ると、三藏は更に國王に向つて、布金寺の老僧から聞いた次第を述べて、眞實の公主は布金寺に居るといふことを奏上げた。國王は二人の話を聞いて且つ驚き、且つ喜び、翌朝は皇后を初め宮中の百官を從へて布金寺へ行幸になり、老僧を宣し出して事の仔細を尋ね、公主を迎へ取つて宮城へ還りました。

其處で國王は勅命を下して布金寺を「勅建寶華山給孤布金寺」と改稱して、世襲の俸祿を附け、老僧には報國僧官の官位を授けて、一年の間公主を養つた恩に報ひ、又畫工に命じて、唐僧師徒の畫像を描かせ、永く鎭華閣の裡に留めました。師弟はそれから四五日の間、宮中に逗留して、樣々の管待を受けて居りましたが、三藏は尙ほも國王の引留めるのを振拂つて、天竺國を出立し、西方の道に上りました。

(九) 受經

天竺國を過ぎて、西に行くこと半月餘りすると、銅臺府といふ處へ來ました。

折しも夏の初でしたが、城下へ入つて暫く進んで行くと、路傍に一構への邸宅があつて、門の壁に、「萬僧不阻」と書いた大きな牌が出て居る。三藏は之を看ると、ひとり點頭いて、

『流石に西方の佛地だけのことがある。』

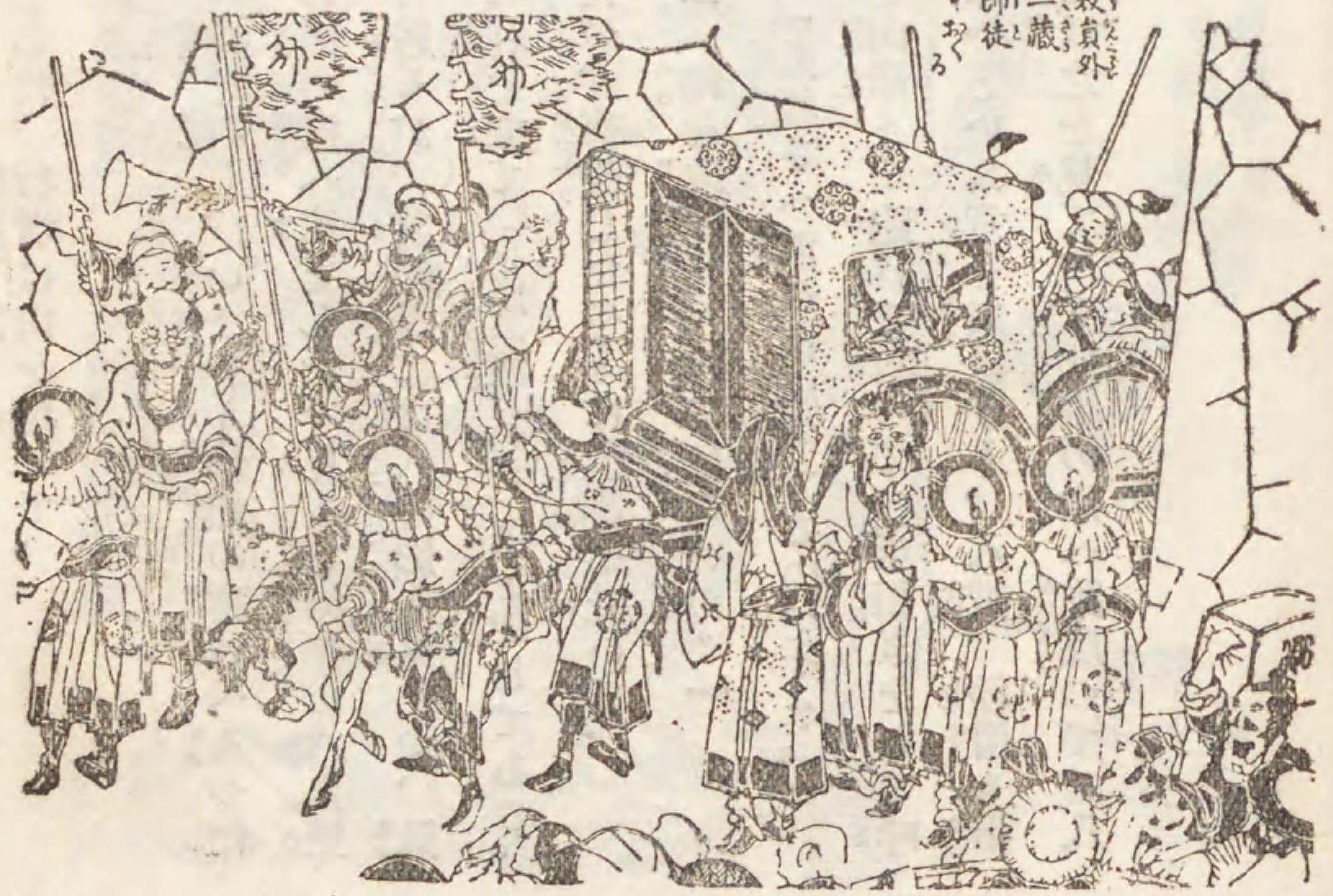
と感嘆し、馬を下りて門の中へ入つて行くと、一個の老人が忙しく出迎へて、四人を裡へ案内したが、東土大唐から遙々靈山へ上つて、佛を拜し、經を求める僧だと聞いて、大層喜んで、直に齋堂へ案内し、家内中が出て、齋飯を勸め、懇に管待しました。其の時老人の話すのを聞くと、此處は銅臺府の中の地靈縣といふ處で、老人は寇洪字は大寛といひ、今年六十四歳になるが、四十歳の時から一萬人の僧に齋を施さうといふ願を立て、二十四年の間に九千九百九十六人の僧に供養をし、後四人で滿願になるといふ處へ、偶然にも三藏師弟四人が尋ねて來たので、これで愈々一萬人の數に滿ちるといふのです。老人は世間の人から寇長者と呼ばれる程の富貴な身の上ですから、滿願の心祝ひだといつて、師從を引留めて日毎に供養し、或は土地の僧を集めて盛んな佛事を營んだりしたので、師弟は思はず十日餘りも寇長者

の家に逗留し、やう〳〵に暇乞ひをして此家を出立することになると、長者は一族縁者を集め、盛んな酒宴を開いて、別れを惜み、翌朝旗を樹て音樂を奏して城外十里の所まで見送つて呉れました。

三藏師弟は長者の厚い志を喜び、且つ靈山まではもう八百里の道と聞いたので、只管路を急いで進んだが、思ひがけない災難が一行の後から追掛けて來ました。それは今朝出立の際、寇長者が旗を樹て、太鼓を打つて城外まで見送つて來た時に、往來の人々は道の兩側へ立停まつて行列の通るのを見物しながら、互に長者の噂をして、その富貴を羨んで居ま

した。其時群衆の中に、此邊りを荒し廻る盜賊が混つて居て、人々の噂を聞き、急に黨類を召集めて、其晩大雨を幸ひに長者の家へ押込み、拔刀を振廻して家内の内を嚇し、家中を捜して金銀や財寶を殘らず奪ひ取つた上に、長者を踢殺して行きました。この嫌疑は自然に師弟の上にかゝつて、忽ち追手をかけられ、銅臺府へ引戻されて、牢屋の中で一晩を送りましたが、行者の働きで、この難を脱れた上に、長者の生命をも取返して、翌日は又改めて銅臺府を出立しました。

それから四五日行くうちに遙かに五



彩の雲に包まれた一座の高峰が見えて來ました。行者は山を指して、

『あれこそ佛祖のお在でになる靈鷲山です。』

と敎へるので、三藏は急に馬から下りて、山を拜し、いよ〳〵佛祖の聖地へ入つたと喜び勇んで路を急ぐと、暫くして一つの河の邊へ出ました。見ると河幅は八九里もあつて、水は白浪を立てゝ滔々と流れて居るが、其の邊には人の影も見えず、只一本の獨木を架した橋があつて、橋の邊に札を立て「凌雲渡」の三字を記してある。三藏は少時河の面と獨木橋を見比べて居たが、落膽したやうに嘆息を吐いて、

『これはとても渡れさうにもない』と言ふ『路を取錯へたのではないか？』

『否、路は差ひません、』と行者は答へる。『此橋さへ渡れば成佛するのです？。』

と言ふや否や、橋へ跳上つて、する〳〵と向岸まで跑けて行つて、手招ぎをして呼んだけれども、三藏は只手を搖つて渡れないといふ意を表はすと、八戒、沙僧も指を咬んで、退後をするばかりでした。行者は之を見て、又此方の岸へ跑戻つて、八戒を捉へて、

『獃子、さア一緒に渡らう！』

悟空前に立つて凌雲渡の獨木橋を渡る

といふと、八戒は地の上へ臥てしまつて、

『いけない〳〵、滑つたら大變だ、まあ饒して呉れ！』

『此の橋さへ渡れば、佛になれるのだから、さア一緒に來い〳〵。』

と行者は八戒を引起さうとして爭つて居ると、忽ち下流から一人の船夫が一雙の船に撑して來て、

『さア、河を渡るなら、これへお上り！』と聲を掛ける。

三藏は之を見て、

『あゝ、あすこへ渡船が來た！』

と言つて喜ぶのを、行者は金睛を据ゑて其船夫を見ると、これは接引佛祖又の名南無寶幢光王佛が假に姿を現はしたものなので、ひとり點頭いて、

『早く船を持つて來い！』

といふと、船夫はやがて船を岸へ寄せる。三藏は喜んで直に船へ上らうとして、不圖見ると、其船には底がないので、驚いて足を引込めようとするを、行者は後から、

『師父、快くお上りなさい。この船は底はないが、風や浪に覆へされる心配はありません』

と言ひながら、一推し推すと、三藏はのめるやうに水の裡へ落込んだ。その刹那に、船夫は手を伸ばして三藏を船へ引上げたので、三人の徒弟も馬を牽き、行李を擔つて續いて船へ上ると、船夫は棹を執つて船を中流へ出しました。その時船の側へ一個の死骸が浮上がつたので、三藏は驚いてその方を眺めて居ると、行者は笑ひながら言つた。

『師父、あれはあなたの躰です。』

『本當に然うだ。師父だ、師父だ！』と八戒、沙僧も聲を立てた。

船夫も三藏を振返つて、

『あなたは今日肉身を脱れたのです。お芽出たう〳〵。』

と言ひながら、無底船を操つて、無事に凌雲渡を越え、西の岸へ船を着ける。師弟四人は急いで岸へ跳上つたが、後を振回つた時には、もう船も船夫も見えなかつた。其處で行者は今の船夫が接引佛祖の化身であつたことを打明けて、人々の惑ひを解き、共々に身も心も輕々と靈山の方へ上つて行くと、花の香も、松の翠も、他處とは異

つて流石は佛祖の靈境だと思はれた。

行者は三藏の先へ立つて雷音寺の山門の前まで來ると、二大金剛が出迎へて、且く師弟を住めて、この報を二の門に傳へ、二の門から又三の門に傳へ、三の門からは直に大雄殿に傳へて、如來至尊釋迦牟尼佛の下に、經を取る僧が到着したことを通じたので、佛祖は大に喜んで、八菩薩、四金剛、五百羅漢、三千掲諦を召集めて、兩側に立列ばせ、旨を傳へて唐僧を召し寄せた。三藏は悟空、悟能、悟淨の三人の徒弟に馬を牽かせ、行李を擔はせて、直に山門を入つて、大雄寶殿の前に進み、如來を拜し、又左右の諸菩薩、金剛等を拜した後、通關文牒を如來の前に捧げて、

『弟子伭奘東土大唐皇帝の旨意を受けて、遙々寶山に詣で、眞經を求めて、衆生を濟ひたいといふ心願でございます。願はくば佛祖の慈悲を以て、早く經を賜つて、歸國をお許し下さいますやうに。』といふ。

如來は之を聞いて、靜かに口を開き、

『かの東土は卽ち南瞻部洲で、貪慾殺生多淫極惡の輩多く、不忠不孝不仁不義を行つて、自ら地獄の災を招き、畜類に變化して、生々世々浮むことが出來ない。

今爰に三藏の經がある。之によつて一切の苦惱を脫れ、災禍を解くことが出來る。三藏といふは、法藏は天を談じ、論藏は地を說き、經藏は鬼を度す。總計三十五部一萬五千三百四十四卷、天下四大部洲の天文、地理、人物、鳥獸、花木、器用、人事、一として此の經に載せないものはない。眞に眞を修め、善を成すの道である。今此の全部を汝に付與して取り去らせるのは易いが、但彼地の民は愚昧無智で、まだ〳〵佛門の奧義を許すべきでない。』と言つたが、側に立つた阿難、迦葉の二尊者を呼んで、『汝等は此の四衆を導いて、先づ齋食を勸め、次に寶閣を開いて、あの三藏三十五部の內から、各部幾卷を選んで、彼等に與へて、東土へ傳へさせよ。』と命じる。

二尊者は旨を領けて、先づ四人を珍樓の下へ案內して、百味の珍羞を排べて、思ふがまゝ賞翫させ、齋食がすむと、今度は寶閣の中へ案內する。三藏師弟は二尊者の後へついて寶閣へ入つて見ると、彩雲に包まれた中に、樣々な經櫃や寶篋がずらりと列んで、其の上には一々紅の籤を貼つて、經卷の名と卷數とが誌してある。三藏は一々其の經卷の名を讀んで居ると、阿難、迦葉は三藏に向つて言つた。

『聖僧には東土から遙々此處へ來られたが、定めし何かの人事があるであらう。早く出して、經を持つて回つたらよからう。』

『弟子は遠方の路を參りましたので、何の準備も致しませんでした。』と三藏が答へる。

『好し〱、白手で經を渡したら、後の者は餓死してしまふだらう。』と言つて、二尊者は笑つた。

行者は此の問答を聞くうちに、耐へられなくなつて、

『師父、我們は如來に此事を申上げて、如來から直接に經を授かつて行かうではありませんか？』

といふのを、阿難は聞いて、

『靜かにせよ、此處を何處だと思ふ？』と一喝した。『そんな騷ぎをせずとも、此處へ來て、靜かに經を接けよ！』

四衆は終に進んで經卷を接取り、一々に包んで、兩擔の荷に造り、八戒と沙僧が肩に挑いで、再び寶座の前へ回り、如來を拜して、厚く禮を述べ、諸菩薩、金剛等を

も一々禮拜して、別れを告げ、門を出て、靈山を下つて行きました。

此の時寶閣の上には一尊の燃燈古佛が居て、唐僧に經を授ける模樣を聽いて居たが、阿難、迦葉が唐僧に傳へた經卷は、すべて無字の經だといふことを知つて居たので、暗かに笑つて、『東土の衆生は愚昧にも、あれを無字の經とも知らずに持つて歸つたが、遙々と遠路を辿つて來た辛苦を無にするとは、不憫なものだ！』と思ひ、白雄尊者に分付けて、後を追はせました。白雄尊者は山門を出るや否や、一陣の狂風を起して唐僧に追ひつき、空中から手を伸ばして、いきなり經卷の包みを搶つて行き、行者が驚いて赶ひ上る間に、經包みを寸々に破つて地へ抛げ棄て、其のまゝ風を歇ませて回つて行きました。師弟は慌てゝ落ち散つた經卷を拾ひ集めて、不圖中を開いて見ると、字が書いてないので、三藏は驚いて、聲を立てた。

『此の經には文字が書いてないが、どうしたのだらう？』

行者は之を聞いて、又他の一卷を開いて見ると、矢張字が書いてない。どの經卷を開いて見ても、すべて同じやうに白紙の經卷なので、三藏は嘆息して、言つた。

『我が東土には福が沒いのであらう。このやうな無字の白本を持つて行つて何に

白雄尊者經卷を破り棄る

ならう！』
行者は三藏を慰めて、
『師父、御心配なさいますな！これはあの阿難、迦葉の奴が、人事を持つて行かないので、故意とこんな白紙の本をつかませたのに相違ありません。直に引回して、此の事を如來に申上げて、彼奴らの賄賂を貪る罪を糺していたゞきませう。』
と言ひながら先へ立つて山路を引回し、山門の外まで行くと、金剛らは四衆を見て笑ひながら、
『聖僧が經を換へに來た。』と言つて、其のまゝ路を開いて通しました。

三藏師弟は再び大雄殿へ入つて、如來の前へ進むと、行者は大聲を揚げて、
『如來、我們四衆は千辛萬苦を凌いで、東土から遙々此處へ來て、如來を拜しましたが、如來の仰せを受けて、經を傳へようといふ阿難、迦葉は、我們が賄賂を贈らないために、故意と無字の白紙本を授けました。如來、萬望あの二人の罪をお糺し下さい。』
と怒鳴り立てる。と佛祖は悟空を制して、
『嚷ぐには及ばぬ。かの兩人が人事を要めたことも、よう知つて居る。たゞ此の經は輕々しく傳へ、空手で求めるべきものではない。汝們は空手で來て、經を求めるので、白本を傳へたのであらう。白本は無字の眞經で、却つて尊いのだが、只汝們東土の衆生には、到底悟る事は出來まい。』と言つたが、又阿難迦葉の二人を呼んで『快く有字の眞經の中から、各部幾卷を選んで、彼等に與へ、其の數を報告せよ。』と分付ける。
二尊者はまた四衆を導いて、寶閣へ入ると、三藏に向つて前のやうに人事を請求する。此の時三藏は沙僧に命じて、紫金の鉢盂を取出させ、双手に捧げて、二尊者の前に差出しながら言つた。

『弟子は本來貧しい上に、遠路を參つて、人事の準備がありません、這の鉢盂は唐王から賜はつて、沿路齋を化うて來た器ですが、今之を心ばかりのしるしに奉上げたいと思ひます。萬望、尊者之を接けて、有字の眞經をお授け下さい。』

阿難は鉢盂を接けて、微笑みながら、迦葉と共に寶閣の中へ進み入り、經を檢べて、一々に取上げて三藏に渡すので、三藏は徒弟を呼んで一卷一卷に披いて行くと、すべて有字の經卷で、其の數五千零四十八卷、即ち一藏の數だけありました。四衆はすべての經卷を整へて馬に馱はせ、殘りを一擔にして八戒に挑はせ、行者は馬を牽き、沙僧は行李を挑ひ、三藏は錫杖を執つて、怡々と大雄殿へ回つて來る。その時如來は雲磬を敲いて、三千の諸佛、揭諦、金剛、菩薩、五百尊の羅漢、八百の比丘僧を招くと、少時の間、天樂遙かに聞え、妙なる樂の音は空に滿ち、祥光瑞氣四方に漲り、八方の諸佛悉く集つて來て、如來の左右へ列びました。如來は阿難、迦葉に向つて、東土に傳へる經卷の數を尋ねると、二尊者は之に答へて、經卷の名と數を讀み上げました。

涅槃經四百卷　　菩薩經三百六十卷

虛空藏經二十卷　　道楞嚴經三十卷
恩意經大集四十卷　　決定經四十卷
寶藏經二十卷　　華嚴經八十一卷
禮眞如經三十卷　　大般若經六百卷
未曾有經五百五十卷　　大光明經五十卷
維摩經三十卷　　三論別經四十二卷
金剛經一卷　　正法論經二十卷
佛本行經一百十六卷　　五龍經二十卷
菩薩戒經六十卷　　大集經三十卷
摩竭經一百四十卷　　法華經十卷
瑜伽經三十卷　　寶常經一百七十卷
四天論經三十卷　　僧祇經一百十卷
佛國雜經一千六百三十八卷　　起信論經五十卷
大智度經九十卷　　寶威經一百四十卷

受經

本閣經五十六卷　　正律文經十卷
大孔雀經十四卷　　唯識論經十卷
具舍論經十卷

以上三藏の中から選んで、總計五千零四十八卷の聖經を與へて東土に傳へました。』

此報告が濟むと、三藏師弟四衆は、一個一個如來の前へ進んで禮拜する。其時如來は三藏に向つて、

『此經の功德は無量である。若し東土へ回つて、一切衆生に示さうといふ場合にも、決して輕々しく與へてはならぬ。必ず沐浴齋戒した上でなくては、卷を開いてはならぬ。』と誡めた。

三藏は之を聞くと、頭を地に着けてお禮を述べ、一切諸佛に向つて、三度禮拜した後、經を頒けて大雄殿を退きました。其時觀音菩薩は進み出て如來に申上げるには、

『弟子が初め仰せを受けて、東土に向ひ、經を取る人を尋ねました時から、今日功の成就しますまで、年を數へるとすべて十四年、五千零四十日に當り、只八日少い

ために一藏の數に合ひません。願はくばまた仰せを受けて、此の數に合せるやうに致したいと存じます。』

如來は之を聞いて大に喜び、八大金剛を召して、

『汝等は快く聖僧の後を追つて　東土に送り届け、眞經を其の地に傳へた後、直に聖僧を領れて引返し、すべて八日の内に事を運んで、一藏の數を完うせよ。』

と分付けたので、八大金剛は雲を飛ばして唐僧に赶ひつき、

『經を取る聖僧、我們に跟いて來られよ。』

と言ひ棄てゝ先へ進むと、唐僧らも輕々と雲へ駕つて、金剛に随つて東へ飛んで行きました。

(一〇)大團圓

太宗皇帝は、貞觀十三年九月に三藏を西天に送つた後、十六年に工部官に命じて、西安關の外に一の高樓を建て、望經樓と名づけて、年々此處へ行幸して、三藏の經を取つて回るのを待つて居た。その後十四年を經過して、今年は貞

觀二十七年となり、太宗は例年の通り望經樓へ行幸して、樓上から西天の方を眺めて居ると、忽ち西の方に五彩の瑞靄が棚引き、一陣の香風が東を指して吹いて來ました。

其時雲の上では、八大金剛が三藏を呼んで、

『此處はもう長安城です。我們は像を現すのを好まないから、下へは下りないが前日觀音菩薩が如來に啓上げて、必ず八日の内に往來して、一藏の數を滿たせよとの仰せでした。もう五日を過ぎて居るから、聖僧には快く經を傳へて、直に引回して來られるがよい。我們は爰で待合せて、共々に西天へ回ることにしよう。呉々も期限を誤らぬやうになさい。』

と言つたので三藏は固く約束して　三個の徒弟と共に雲を下りて、望經樓の前へ下り立ちました。

太宗は之を見て、群臣百官を率ゐて、樓を下り、三藏を迎へて、共々に王城へ回ると、城中の人民は口々に、『經を取りに行つた聖僧が回つた。』と言傳へ、みな門口へ出て　一行を迎へました。三藏師弟はやがて朝廷へ進み、玉座の前へ跪いて

三藏法師帰朝して洪福寺に入給ふ

經卷を獻ると、皇帝は三藏を殿上へ上せて座を賜はり、又三個の徒弟の來歷を尋ねて、稱讚の言葉を賜はり、或は西方の路程を問ひ、或は路上の出來事を尋ね、三藏が一々之に答へるのを聞いて、或は驚き、或は感じ、又三藏が奉上げた通關文牒を披いて、多くの國々の寶印や花押を查めた後、東閣で盛んな筵宴を開いて、師弟四衆を歡待しました。

その夜三藏は東閣を退つて、往年住んだ洪福寺へ歸ると、衆僧は法衣を着更へて、一同山門の前に出迎へ三藏に向つて、

『師父、今朝起きて見ますと、寺内の松樹の枝が、一夜の中に悉く東を向いて居りますので、御出立の折のお言葉を思ひ出して、俄かに寺中を掃き淨め、法衣を更めてお迎への準備をして居りますと、果して御歸朝の風說が傳はつたので、先刻から爰で待受けて居りました。』といふ。

三藏は衆僧の志を喜び、直に方丈へ入つて、齋飯を吃し、問はれるまゝに路上の物語や、靈山の光景を話して夜を更かしました。

翌朝三藏は太宗の召によつて朝廷へ出ると、太宗は三藏師弟を從へて鴈塔寺へ行幸になり、三藏に仰せて大藏の眞經を讀誦させ、皇帝は群臣百官と共に壇の下に立つて聽聞した。三藏は其時徐かに壇に上り、經卷を披いて讀誦しようとすると、忽ち空中に八大金剛の姿が現れて、大聲に、

『聖僧、其經を措いて、我們と共に西に回られよ。』と呼ばはつた。

此聲を聞いて壇の下に立つた行者、八戒、沙僧の三人は、白馬と共に雲を踏んで空に騰ると、三藏も經卷を差措き、太宗に向つて壇上から頭を下げ、

『陛下、臣僧は西天へ回つて、佛祖に見えねばなりません。』

と言ふや否や、壇を離れて虛空に騰り、皆々金剛に跟いて西の方へ飛んで行きました。太宗を首め群臣百官は、此光景に膽を潰し、急に跪いて空を拜した後、別に高僧を選んで水陸大會を執行ひ、大藏の眞卷を讀誦して、無緣の餓鬼を濟度させると共に、經文の謄本を作つて、遍く天下に弘めさせました。

さて八大金剛は三藏師弟を伴つて西に向つたが、往復八日の期限を誤らずに靈山へ回り着き、大雄殿に進んで、如來の前に此由を伏奏すると、如來は直に唐僧らを寶座の前へ召して、それ〴〵に職を授けました。如來は先づ三藏に向つて、

『聖僧、汝の前世は、我が第二の徒弟で、名を金蟬子と言つた者であるが、說法を聽かない科によつて、靈を貶して東土に轉生させた。今幸ひに敎に歸依して、眞經を取つて東土に傳へた功あるによつて、大職を授けて旃檀功德佛とする。』と言ひ、次に行者に向つて、

『孫悟空、汝は途中聖僧を守護して、魔を懲らし、怪を降し、よく始終を全うした功あるによつて、大職を授けて、鬪戰勝佛とする。』と言ひ、次に八戒に向つて、

『猪悟能、汝は聖僧を保護して、路々荷を擔つた功あるによつて、職を授けて、淨

壇使者とする。』といつた。
此時八戒は、不平さうに、嘴を尖らして言つた。
『他の者は佛にして、私だけは淨壇使者にするのは何ういふ譯です?』
如來は笑つて、
『汝は食腸が大きいが、今天下四大部洲の中で、我が教を守る者の數も甚多い。凡ての佛事には汝を遣はして壇を淨めさせるのであるから、供養の品級を味ふことが出來て結構ではないか。』といつたが、更に沙僧に向つて、
『沙悟淨、汝は聖僧を保護して山を登り、馬を牽くの功あるによつて、職を授けて、金身羅漢とする。』と告げ、最後に白馬を呼んで言つた。
『汝は聖僧を馱して西に來り、又聖經を負うて東に回つた功あるによつて、職を授けて、八部天龍とする。』
如來は掲諦を呼んで、白馬を牽いて、靈山の後の崖の下にある化龍池の中へ入れさせると、馬は忽ち變じて一條の金龍となり、池の中を飛出して、山門の裡にある擎天華表の柱に卷き着きました。

一同は再拜して、如來の前にお禮を述べる。此の時行者は三藏に向つて、
『師父、もう佛になつた上は、何卒私の頭の箍兒を脫していたゞきたい。』
と願ふのを聞いて、三藏は行者の頭を見やりながら、
『悟空、私が脫すまでもない、まづ頭へ手をやつて見よ。』
と言はれて、行者は忙がしく頭を摸つて見ると、何時の間にか箍兒はなくなつて居ました。
此のやうにして、四衆は悉く正果を成し、龍馬も同じく正果に歸したので、靈山の諸神諸尊者らすべて如來の前に集まつて、說法を聽き、說法が畢つて各其の位置に歸りました。其時天華繽紛として降り、天樂四方に响いたので、一同は合掌歸依して口々に佛名を念へ、
『南無燃燈上古佛　南無藥師琉璃光佛　南無釋迦牟尼佛
南無過去未來現在佛　南無淸淨喜佛　南無毘盧尸佛
南無寶幢王佛　南無阿彌勒尊佛　南無阿彌陀佛
南無無量壽佛　南無接引歸眞佛　南無金剛不壞佛

南無寶光佛
南無寶用光佛
南無那羅延佛
南無善遊歩佛
南無慧爐照佛
南無慈力王佛
南無智慧勝佛
南無日月珠光佛
南無賢善首佛
南無觀世燈佛
南無大慧力王佛
南無才光佛
南無觀世音菩薩
南無普賢菩薩

南無龍遵王佛
南無現無愚佛
南無切聽華佛
南無旃檀光佛
南無海德光明佛
南無金華光佛
南無世靜光佛
南無無幢勝王佛
南無廣慧嚴佛
南無法勝王佛
南無金海光佛
南無旃檀功德佛
南無大勢至菩薩
南無清淨大海衆菩薩

南無精進喜佛
南無娑甯那佛
南無才功德佛
南無魔尼幢佛
南無大慈光佛
南無才光明佛
南無日月光佛
南無妙音聲佛
南無常光幢佛
南無須彌光佛
南無大通光佛
南無鬪戰勝佛
南無文殊菩薩
南無蓮池海會菩薩

南無西天諸菩薩　南無三千揭諦菩薩　南無五百阿羅菩薩
南無比丘夷塞菩薩　南無無邊無量菩薩　南無金剛大士菩薩
南無淨檀使者菩薩　南無金身羅漢菩薩　南無八部天龍菩薩

是等一切世界の諸佛、願はくば此功德を以て、佛淨土を莊嚴し、上は四重恩に報じ、下は三途の苦を濟ひ、若し見聞する者あらば、悉く菩提心を發し、同じく極樂國に生じて、盡く此の一身に報せん。

十方三世一切佛　諸尊菩薩摩訶薩　摩訶般若波羅蜜』

と念じる聲は大雄殿に響き渡りました。

西遊記 終

發行者寄贈

昭和二十四年十一月一日 印刷
昭和二十四年十一月十日 發行

西遊記

定價二八〇圓

著者 中島茂一

發行者 合資會社 冨山房
代表者 坂本守正

印刷者 京都市下京區西洞院七條南
內外印刷株式會社
代表者 富森茂彰

發行所 東京都千代田區神田神保町一ノ三
合資會社 冨山房
電話神田(二五)二一七一―八
振替番號東京五四五二九

天勇社

児95-S-48
1200600489254